

**総 合 英 語**  
**Comprehensive English**  
**Through Select Unforgettable Writings**

授業の狙いとその指導視点  
— 視訳、音読、音声模倣、語彙力、英文法 —

北海道教育大学旭川校  
外国語（英語）非常勤講師  
中 島 隆 智

# 目 次

## I. 本授業の狙いと授業展開の骨子・・・1

## II. 視訳・・・1

### 1. 日英語の表現上の相違点・・・1

(1) 動詞の位置・・・1

(2) 修飾語句の位置・・・1

### 2. 視訳に依る語順整合・・・1

### 3. 短期記憶保留・・・1～2

(1) 前置詞 of が誘導する「Of-Phrase (形容詞句)」・・・1

(2) 動詞や準動詞が目的語を従える表現・・・2

### 4. 意味単位区分標識・・・2

## III. 音読・・・2

## IV. 音声模倣と心的具象化・・・2～3

## V. 語彙力・・・3

### 1. 直読直解力に必要な最少単語数・・・3

### 2. 熟語数 (含連語)・・・3

### 3. 語彙力増強法・・・3

(1) 多読・・・3

(2) 派生語・・・3

(3) メタファー拡張・・・3

## VI. 規範英文法・・・3～4

## VII. 単元指導資料：【視訳】、【語注】、【音節分析】・・・4～35

単元 2 行動の規範 (C. S. Lewis: *The Case for Christianity*)・・・5～6

単元 6 物を忘れる方法 (Robert Lynd: *The Art of Forgetting*)・・・7～8

単元 8 読書論 (Lafcadio Hearn: *On Reading in Relation to Literature*)・・・9～10

単元13 経済学の領域と方法 (A. Marshall: *The Scope and Method of Economics*)・・・11～13

単元15 思想の自由 (John Bagnal Burly: *A History of Freedom of Thought*)・・・14～15

単元16 二十年後 (O. Henry: *After Twenty Years*)・・・16～17

単元17 雪女 (Lafcadio Hearn: *Kwaidan*)・・・18～19

単元18 孤独 (Sherwood Anderson: *Winesburg, Ohio!*)・・・20～21

単元21 常識と科学の違い (Arthur Thomson: *The Aim of Science*)・・・22～23

単元24 科学概論 (Richard Gregory: *Discovery or the Spirit and Service of Science*)・・・24～25

単元25 日英語の鏡像関係 (Donal L. Smith: *Mirror Images*)・・・26～27

単元26 言語の持つ性質 (Otto Jespersen: *Essentials of English Grammar*)・・・28～29

単元27 言語とは何か (Edward Sapir: *Language*)・・・30～31

単元28 言語と種の類似性 (Charles Darwin: *The Descent of Man*)・・・32～33

番外編 5 「青春」 (Samuel Ullman: *From the Summit of Years, Four Score*)・・・34～35

## I. 本授業の狙いと授業展開の骨子

本授業の狙いは「直読直解力 (Direct Reading)」と「音読力 (Oral Reading)」を養う事である。そして「積極的な学習転移 (Positive Transfer of Learning)」に依って英語の発信力と受信力を研磨する。授業展開は先ずテキスト準拠のCDを「音声模倣 (Shadowing)」をし乍ら聴き、英語の「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」を理解する。続いて教師の模範朗読、指名学生の音読と視訳演習、指導資料プリントに依る確認、再度CD聴解、音声模倣に加えて「心的具象化 (Mental Imagination)」を図り、単元内容と音声とを融合する。続いてテキスト問題に依って既習英文と発展的英文の理解を増強深化する。単元学習終了後、単元内容に就いての「英文コメント (A4半1枚, 350語)」を提出する。

## II. 視訳

### 1. 日英語の表現上の相違点

「対照言語学 (Contrastive Linguistics)」に依れば日英語の違いは多様であるが、特に直読直解力に対する最も大きな阻害要因は「語順 (Word Order)」の違いである。両語の語順は「鏡像関係 (Mirror Image)」と言われる通り逆様である。然しそれを整合して直読直解を可能にする読解技法が「視訳 (Sight Translation)」である。最も大きな語順の相違点は次の2点である。

**(1) 動詞の位置：**【英語】語順が「主語＋動詞＋目的語又は補語」である。【日本語】語順が「主語＋目的語又は補語＋動詞」である。【例文】私の論文は自分が評価していた程に、教授の眼にはよく見えなかったらしい。それでも私は予定通り及第した。My professor apparently did not have as high an opinion of my thesis as I did. I was, however, allowed to graduate that year. (夏目漱石：「こころ」、Edwin McClellan : *Kokoro*)

**(2) 修飾語句の位置：**【英語】関係詞や分詞、形容詞等を使って名詞 (被修飾語) の後に長い修飾語句を付加される「修飾語後置形式 (Postposition)」である。【日本語】修飾語句が名詞 (被修飾語) の前に付加される「修飾語前置形式 (Preposition)」である。【例文】疑いの塊りを其の日其の日の情合いで包んで、そっと胸の奥に仕舞って置いた奥さんは、其の晩その包みの中を私の前で開けて見せた。Such, then, was her secret which she had kept in her heart all these years in gentle sorrow, and which she revealed to me that night. (引用同書)

### 2. 視訳に依る語順整合

「視訳 (Sight Translation)」は、日英語の語順の違いを「先入先出法 (FIFO)」の原理に基づいて文頭から意味単位毎に逐次情報把握をする事に依って整合し、両語の思考の流れを一樣にして直読直解力の向上を目指す英文直読直解技法である。従って従来の「訳読法 (Translation Method)」に於ける「逆展開型情報処理法 (Reversal Information Processing)」は使用しない。尚、この直読直解技法は同時通訳の技法であり、浦口文治 (1872-1944、英語教育者) が提唱した「グループ教授法 (Group Method)」の概念と同じである。次の例文の和訳は従来の「訳読法」と「視訳」の意味把握の違いを示している。

He thought of his own life, the high hopes with which he had entered upon it, the limitations which his body forced upon him, his friendlessness, and the lack of affection which had surrounded his youth. He did not know that he had ever done anything but what seemed best to do, and what a cropper he had come! (W. S. Maugham: *Of Human Bondage*) 【訳読法】彼は自分自身の人生を考えた、人生の門出にさいして抱いていたあの高い望み、肉体が強いたあの限界、一人ぼっちの境遇、そして、青年をとりまいていたあの愛情の欠落。いつも最善と思えることだけをやってきたのに、自分はなんとという失敗者になってしまったことか! (大橋健三郎：「人間の絆」)。【視訳】彼の思いは自分自身の人生に就いてであった。大きな希望を抱いて社会に出たのだが。様々な限界を彼の肉体が強いた。友達が居なかったし、愛情も欠落していた。その様な状況が取り巻いていたのだった、彼の青春をである。彼には次の事が全く分からなかった。一体、何をしたと言うのであろうか、何時も最善を尽くして来たのに。何んたる墜落振りか。(中島)

### 3. 短期記憶保留

「短期記憶保留 (Momentary Memory)」とは、文中の一部の語句を記憶に留めて、後続の語句を先に把握してから前出語句に戻ってその部分全体の視訳を終える技法である。従ってその部分だけは従来の「訳読法 (Translation Method)」に於ける「逆展開型情報処理法 (Reversal Information Processing)」を使う事に成る。その例が次の2つである。

**(1) 前置詞 of が誘導する「Of-Phrase (形容詞句)」：**「Of-Phrase」が後方から修飾する短い前出語句を短期記憶保留にして、先に Of-Phrase を把握してから前に戻って全体を視訳する。実際はこの表現全体を一つの塊として把握する方がスムーズな整合理解が出来る。【例文】At friendly meetings, and when the wine was to his taste, something eminently human beamed from his eyes; something indeed which never found its way into his talk, but which spoke in these silent symbols of the after-dinner face. (R. L. Stevenson : *Dr. Jekyll and Mr. Hyde*) 友人達との会で、特にワインが口に合うと、何か非常に人間的な物が輝いて目から迸り出た。それは全く彼の言葉には出て来ない物であったが、現れるのはこの様な食後の顔の沈黙の象徴としてであった。

(2) 動詞や準動詞が目的語を従えている表現：短い動詞や準動詞は短期記憶保留にして先に目的語を把握してから、前へ戻って全体を視訳する。【例文】It was on the moral side, and in my own person, that I learned to recognize the thorough and primitive duality of man. (同書) それは道德の側面であると同時に自分自身の問題でもあった。即ち私が学び取り、完全に根本的な人間の二重性を認める様に成ったのはである。

#### 4. 意味単位区分標識

視訳に於ける意味単位区分は原則的に次の様な「意味単位区分標識 (Sense-Group Markers)」に従う。

- (1) 文構成素：主語、動詞 (慣用的動詞句)、目的語、補語、修飾語句。
- (2) 句読点：ピリオド、コンマ、コロ、セミコロ、ダッシュ、カッコ、引用符。
- (3) 前置詞：名詞句、形容詞句、副詞句。
- (4) 分詞：形容詞句 (前置、後置)、副詞句 (分詞構文)。
- (5) 動名詞：名詞句 (主語、目的語)。
- (6) 関係詞：名詞節、形容詞節、副詞節。
- (7) 接続詞：句、等位節、従位節 (副詞節)。
- (8) 疑問代名詞：名詞句、名詞節。

### III. 音読

「音読 (Oral Reading)」とは英語特有の「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」を理解して英文を音読し、その意味と音声とを融合する言語活動である。その最終的な狙いは言葉の4技能 (聴く、話す、読む、書く) への「積極的な学習転移 (Positive Transfer of Learning)」である。日英語の発音上の最も大きな違いは、英語は「かぶせ音素 (Suprasegmental Phonemes)」と呼ばれる「超分節音素 (Supersegmental Phonemes)」の言語であり、複数の音節が連声されて「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」を持ち、破裂的な子音で終わる「閉音節語 (Closed Syllable Words)」と「短音節語 (Monosyllable Words)」が多く、「内容語 (Content Words)」の音節の1ヶ所に「第一強勢 (Primary Stress)」が在る。日本語は「分節音素 (Segmental Phonemes)」と呼ばれる「音節拍子リズム (Syllable-Timed Rhythm)」の言語であり、「高低アクセント (Pitch-Accent)」を持ち、各音節が同じ長さで明瞭に発音される。英語のこの様な強弱リズムは次の様な「英音法 (English Prosody)」から派生すると考えられている。

- (1) 「内容語 (Content Words)」の「音節強勢アクセント」と「機能語 (Functional Words)」の連声弱音。
- (2) 子音+短母音の「連声 (Liaison)」と「r音挿入 (“r”Intrusion)」。
- (3) 語尾子音の閉音節発音と短音節発音。

国弘正雄 (1930-2014、文化人類学者、同時通訳者、元英国エジンバラ大学特任客員教授。著書及び訳書多数、代表著書『英語の話し方 (1970)』、『英語思考と日本思考 (1988)』、『国弘正雄自選集全6巻 (1982)』) は音読に就いて『英語の学び方 (2006)』の中で次の様に述べている。

ひと通り意味のわかった英文を、ひたすら音読する。これが私の提案する国弘流『英語音読法』です。そしてこの音読法を私は『只管朗読』と名づけ、普及につとめてきました。さまざまな誘惑に負けて回り道をするのではなく、英語とまっすぐ向き合って声を出して読む。そのような基本作業こそが、実はすべてのテクニックをこえた大きな効果を持つのだということを、この『只管朗読』という四文字のこぼれに込めて表現しています。・・・英語を上達させるためには、『ひたすら音読』することです。繰り返し読んで努力する、外国語学習の原点はそこにあります。

### IV. 音声模倣と心的具象化

音読は既習教材の意味と音声を「融合 (Fusion)」する言語活動であるが、それを支える活動が「音声模倣 (Shadowing)」である。母語話者の音声を可能な限り正確に模倣して準える。これは日常生活に於いて無意識的に心の中で話し相手が伝達する情報を繰り返す言語的無声音動作、即ち「内語 (Inner Voice/Subvocalization)」を有声音化した学習活動である。その様な活動を通して、英語の話し言葉に含まれる色々な音声的要素、即ち発音、強勢、抑揚、リズム、ポーズ等に関する「英音法 (English Prosody)」を理解する。鳥飼玖美子 (1946-、同時通訳者、立教大学大学教授) に依れば、音声模倣には次の様な効用が在ると言う。

- (1) 英語的リズムの会得、日本語的発音 (無強弱音声、子音語尾の母音化) の矯正。
- (2) 英語の音声的データベースの構築。
- (3) 英文読解力の向上。
- (4) 速い音声英語の聴解力養成。

- (5)音読のスピード化。
- (6)スピーキング力の向上。
- (7)聴解集中力の強化。

「心的具象化 (Mental Visualization)」、別名「映像化連想 (Imaging Association)」は、音声聞いて具体的な事物や動作を想像力で映像化する事であり、文字と音声を融合化し乍ら情報理解を深めて記憶に留める言語活動である。

## V. 語彙力

### 1. 直読直解力に必要な最少単語数

学習指導要領が求める必修標準単語数は、中学校1,200語、高校「コミュニケーション(I)」400語、「コミュニケーション(II)」700語、「コミュニケーション(III)」700語、合計3,000語であるが、直読直解力に必要な最少基本単語数は約 8,000~10,000語であり、加えて各自の専門用語約1,000語が必要であると考えている。竹蓋幸生(英語教育学者、千葉大学名誉教授)のコンピューター分析に依れば、単語数8,000語の実用英語に対する有効率は56%である。

### 2. 熟語数 (含連語)

最低必要熟語数は連語も含めて約 2,000語であると考えている。この事に就いての専門家の見解は様々である。例えば、松本道弘(同時通訳者、元ハワイ大学教授、国際ダイアローク学協会会長)は 6,000語、志賀武男(元早稲田大学教授)は 4,000語、大塚高信(言語学者)は 3,000語を提唱している。

### 3. 語彙力増強法

#### (1)多読

語彙力増強の最も有効な手段は「多読 (Extensive Reading)」に依る「暗黙的語彙学習 (Implicit Vocabulary Learning)」である。然し高校3年間で学習する旧学習指導要領に準拠するテキスト(「英語I」、「英語II」、「リーディング」)の読書量は単語数の観点から分析すると、反復単語使用をも含めて約32,000語であった。一方、英国の小説家 William Somerset Maugham (1874-1965)の小説 *The Moon and Sixpence* (1919)の使用単語総数は約 72,000語である。従って高校3年間の読書量はこの小説の約半分であり極めて少ない事が分かる。

#### (2)派生語

単語の「語幹 (Stem)」に付加される「接辞 (Affix)」、即ち「接頭辞 (Prefix)」と「接尾辞 (Suffix)」に依る「派生語 (Derivative)」の理解が有効な語彙力増強法である。更に「複合語構成連結詞 (Compositional copulative)」、例えば、all-、ever- 等や、「複合語構成付加詞 (Compositional Adjunct)」、例えば、-based、-made 等も語彙力増強に有効である。

#### (3)メタファー拡張

「メタファー拡張 (Metaphorical Extension)」とは単語の「原義」を拡大解釈して、意味上の共通性(家族的な類似性)を持つ「多義性 (Polysemy)」を齎す表現技法である。これは英単語の大きな「包摂性 (Subsumption)」に依るものである。例えば、動詞 seize の原義は「没収する」であるが、メタファー拡張に依って「心を捉える」、即ち「心を痛める」と言う意味に成り、次の様な文が可能に成る。

A sudden tremor of his heart made him slightly breathless. An absurd suspicion seized him. (W. S. Maugham: *Red*) **【視訳】**突然心が乱れて息苦しさを感じた。馬鹿げた疑惑の念で心が痛んだ。

## VI. 規範英文法

語注の為に依拠する英文法は既に言及した通り、学生達にとって最も馴染み深い「規範英文法 (Prescriptive English Grammar)」であるが、特に直読直解力に必要な最少限度の文法項目は次の通りである。尚、英文法の学び方は、演繹法に基づいて、先ず最低必要な文法項目の規則とその例文を理解し、1つの塊として記憶する事である。後はその表現形式の語彙や時制を状況に応じて置換したり変形したり類推したりして理解力と表現力を養う。

- (1)文 型：第二文型 (S+V+C)、第三文型 (S+V+O)
- (2)時 制：現在形と過去形(動作、状態、事実)。
- (3)完了形：現在完了形と過去完了形(完了、結果)、現在完了進行形と過去完了進行形(継続動作)。
- (4)仮定法：仮定法過去形と仮定法過去完了(事実の反対の仮想、残留帰結節)。

- (5)不定詞：名詞的用法（主語）、形容詞的用法（修飾後置形式）、副詞的用法（目的）。
- (6)分詞：分詞構文（付帯状況）、形容詞的用法（修飾後置形式）。
- (7)関係詞：関係代名詞（制限用法、前置詞＋関係代名詞）、関係副詞（where, when）。
- (8)受動態：行為者不明。

## VII. 単元指導資料：【視訳】、【語注】、【音節分析】

「総合英語」の単元指導資料の骨子は「視訳 (Sight Translation)」、「語注 (Glossary)」、「音節分析 (Accentuation)」である。「語注 (Glossary)」は「規範英文法 (Prescriptive English Grammar)」に依拠しており、殆どの学生が高等学校で学習した「学校英文法 (School English Grammar)」であるので容易に理解する事が出来る。「音節分析 (Accentuation)」は英語の「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」の根幹である「第一強勢 (Primary Stress)」の表示であり、英語の強弱リズムを理解する支援資料である。尚、授業で取上げる単元は次の通りである。進度は2回の授業で3単元を目安にするが、学生の理解度に呼応して柔軟に対応する。

- 単元 2 行動の規範 (C.S. Lewis: *The Case for Christianity*)
- 単元 6 物を忘れる方法 (Robert Lynd: *The Art of Forgetting*)
- 単元 8 読書論 (Lafcadio Hearn: *On Reading in Relation to Literature*)
- 単元13 経済学の領域と方法 (A. Marshall: *The Scope and Method of Economics*)
- 単元15 思想の自由 (John Bagnal Burly: *A History of Freedom of Thought*)
- 単元16 二十年後 (O. Henry: *After Twenty Years*)
- 単元17 雪女 (Lafcadio Hearn: *Kwaidan*)
- 単元18 孤独 (Sherwood Anderson: *Winesburg, Ohio*)
- 単元21 常識と科学の違い (Arthur Thomson: *The Aim of Science*)
- 単元24 科学概論 (Richard Gregory: *Discovery or the Spirit and Service of Science*)
- 単元25 日英語の鏡像関係 (Donal L. Smith: *Mirror Images*)
- 単元26 言語の持つ性質 (Otto Jespersen: *Essentials of English Grammar*)
- 単元27 言語とは何か (Edward Sapir: *Language*)
- 単元28 言語と種の類似性 (Charles Darwin: *The Descent of Man*)
- 番外編 5 「青春」 (Samuel Ullman: *From the Summit of Years, Four Score*)

総合英語  
Comprehensive English  
Through Select Unforgettable Writings

単元2. 行動の規範 *The Case for Christianity* by Clive S. Lewis

【著者略歴】 Clive Staples Lewis (1898-1963) : 英国小説家、英文学者、中世文化研究者、神学者 (キリスト教擁護)、元ケンブリッジ大学中世英文学教授。オックスフォード大学卒。代表著書『*The Chronicles of Narnia* (1950-56)』。

1. 【視訳】と【語注】

NB (Nota Bene = L. Note Well) : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\**The Case for Christianity* 「キリスト教の精髓 (1942)」。【語注】 *The Case for ~* : 「~の精髓」。Case は「実情、真相、擁護論」。*The Case* は「短期記憶保留 (Momentary Memory)」にして、先に *for Christianity* を把握する。従ってこの語句は従来の訳読法に依る「逆展開型情報処理法 (Reversal Information Processing)」を使う。但しこの様な短い語句は一つの纏まった意味単位として、詰まり、意味の塊として理解する方がスムーズに情報把握をする事が出来る。

\**however it sounds, I believe we can learn something very important from listening to the kind of things they say.* 【視訳】どの様にそれが聞こえ様とも、私は次の事を確信している。即ち私達は学ぶ事が出来ると言うのである。非常に重要な事柄を聞く事に依ってである。その様な類の物事を人が言っているのである。【語注】 ①*however it sounds* : 譲歩表現 (= *however it may sound*)。②*I believe* : 直後に名詞節誘導の接続詞 *that* が省略されている「~と言う事を信じている」。③*something very important* : *something* は直後に形容詞「修飾語後置形式形容詞 (Postposition)」を従える。④*learn ~ from . . .* : 連語「. . . から~を学ぶ」。⑤*the kind of things they say* : *they say* は接触形容詞節、直前に関係代名詞 *which* が省略。

\**They say things like this* : 【視訳】彼等が言うのは次の様な事柄である。【語注】 ①*say* : 動詞の現在時制 (反復動作)。②句読点コロン (:) : 引用内容の誘導「次の通りである」。

\**Leave him alone, he isn't doing any harm* 【視訳】或いは次の様に言う。「放っておけ、奴は、何も危害を加えてはいないんだから。」【語注】 ①句読点ダッシュ (-) : 文中の語句の強調や補足説明の誘導「或いは、又は」。②*Leave him alone* : 「彼は放っておけ」。leave ~ alone は慣用的連語「~を1人にしておく、放っておく」③*he isn't doing any harm* : do ~ harm 慣用的連語「~に危害を加える」。

\**Why should you shove in first?* 【視訳】「一体全体、何故お前は割り込むんだ、最初に」。【語注】 ①*Why should you* ? : 助動詞 *should* は疑問詞と共に強い疑問を表わす。②*shove in* : 慣用的連語「割り込む」。

\**How'd you like it if anyone did the same to you?* 【視訳】「どう思うかね、もし誰かが同じ事をしたら、君に対して」。【語注】 ①*How'd you like it* : 仮定法過去形の帰結節「どの様に思うか」。How'd = How would。②*if anyone did the same to you* : 仮定法過去形の条件節「若し同じ事を君にしたら」。

\**people say things like that every day, educated people as well as uneducated, and children as well as grown-ups.* 【視訳】人々が言うのはその様な事である、然も毎日。教養人も無教養人も、子供も大人もである。【語注】 ①*educated people as well as uneducated, and children as well as grown-ups* : 並列記述挿入句、前出語 *people* の追加的補足説明句。②*~ as well as . . .* : 慣用的前置詞句 (= *not only . . . but also ~*) 「. . . と同じ様に~も又」。

\**Now what interests me about all these remarks is that the man who makes them isn't just saying that the other man's behavior doesn't happen to please him.* 【視訳】さて、興味が惹かれるのは、これ等全ての言葉に就いてであるが、次の様な事である。即ち人がそれ等の言葉を発するのは、単に次の様な事を言っているのではないと言う事である。即ち他人の動作がたまたま気に食わないと言う事を単に言っているのではないと言う事である。【語注】 ①*Now* : 間投詞的副詞「さて、ところで、実は」。②*what* : 関係代名詞「~である所のもの」。③*is that ~* : *that* は名詞節誘導接続詞「~と言う事である」。④*the man who makes them* : 「その様な言葉を発する人」。makes them は「その様な言葉を発する」 (them = these remarks)。⑤*isn't just saying that* : *that* は名詞節誘導接続詞「単に~と言っているのではない」。⑥*doesn't happen to please him* : happen to は連語「たまたま彼を喜ばせない」。

\**He is appealing to some kind of standard of behavior which he expects the other man to know about.* 【視訳】彼が訴えているのは或る種の行動規範であり、その規範に就いて期待している事は、相手がその規範を知っていると言う事である。【語注】 ①*He is appealing to some kind of standard of behavior* : 「彼は或る種の行動規範に訴えている」。英語では前置詞 *of* が誘導する形容詞句 (*of*-phrase) が多用されるが、視訳ではその句が修飾する前出の被修飾語句を短期記憶保留にして、先に *of* 以下を把握するとスムーズに語順整合が出来る。従ってそこは「逆展開型情報処理法 (Reversal Information Processing)」を使う事に成る。然しこの様な表現は既に言及した通り、一つの塊、詰まり纏まった意味単位として把握する方が良い。【類似表現】 *on this side of the river* (川のこちら側に)、*to the north of London* (ロンドンの北方に)、*the works of Shakespeare* (シェクスピアの作品) 等。②*which he expects the other to know about* : 「その様な行動規範を相手が知っているものと思っている」。関係代名詞 *which* の先行詞は *some kind of standard of behavior* である。expects ~ to は連語「~

に—する事を期待する」。to know about の直後に来るべき目的語 some kind of standard of behavior は関係代名詞として前に出ている。従って「(その様な行動規範に就いて) 知っている事を」と言う意味である。

**\*the other man very seldom replies. "To hell with your standard" 【視訳】**相手の男性はめったに次の様には返答しない。即ち「くそくらいだ、お前の規範など!」と。【語注】①seldom: 「殆ど～しない(頻度)」。不完全否定副詞。【類似語】hardly、scarcely、rarely等。②To hell with: 慣用的罵倒俗語「～なんて糞食らえだ」。

**\*he tries to make out that what he has been doing doesn't really go against the standard, or that if it does, there is some special excuse. 【視訳】**彼の意図は次の様な事を主張する事である。即ち彼がずっとやって来た事は実際的には違反していないと言う事であるが、規範に対してである。或いは又、次の事を主張する事である。即ち仮に違反していたとしても、何か特別な言い訳が在ると言う事である。【語注】①make out: 熟語「～と言う事を主張する」。②what he has been doing: 関係代名詞 what は短期記憶保留、先に he 以下を把握。③go against: 連語「～に違反する」。④or that if it does, there is some special excuse: 接続詞 that が誘導する名詞節、前出熟語 make out の目的語。代名詞 it は前出名詞節 what he has been doing を代名。動詞 does は前出動詞 go againstを代動。

**\*He pretends there is some special reason in this particular case why the person who took the seat first should not keep it, or that things were quite different when he was given the bit of orange, or that something has turned up which lets him off keeping his promise. 【視訳】**彼(相手)は次の様に言い張る。即ち何か特別な理由が在ると言うのである。この特殊なケースに於いてはである。その理由とは、その人物、即ちその席に最初に座った人物は、そこに座り続けるべきではないと言う理由である。或いは又、次の様に言い張る。即ち状況が全く違うと言うのである。彼が少しのオレンジを貰った時の状況とはである。或いは又、或る事が起きて仕舞って、その事に依って、彼は守らなくても良いと言うのである、自分の約束なんかを。【語注】①pretends: 「～の振りをする、～と言い張る」。直後に名詞節誘導の接続詞 that が省略。②there is some special reason in this particular case why: 「この特殊なケースに於いて～であると言う特別な理由が在る」。there is は短期記憶保留にして、先にsome以下を把握。関係副詞 why の先行詞は some special reason。視訳では関係詞の直前で区切る。③or that: 「或いは又～と言う事を主張する」。that は名詞節誘導の接続詞、前出動詞 pretends の目的語。④things were quite different: 「状況が全く違っていた」。複数形 things は「状況」。⑤something has turned up which lets him off keeping his promise: 「約束を免除する或る事が起きて仕舞った」。has turned up は現在完了形の熟語。関係代名詞 which は修飾後置形式の形容詞節を誘導。視訳ではその直前で区切る。lets him off は熟語「彼に—する事を免除する」。

**\*It looks, in fact, very much as if both parties had in mind some kind of Law or Rule of fair play or decent behavior or morality or whatever you like to call it, and about which they really agreed. 【視訳】**次の様に思われるのであるが、実際問題として、非常に強くである。即ちまるで両者が共に持っているもの、心中に於いてであるが、それは或る種の法、或いは規則であり、フェアプレイのそれであり、品性の在る行動やモラル、或いはその様な類のものであるが、兎に角、その様なものに就いては、彼等は実際には同じ見解を共有していた様に思われるのである。【語注】①It looks, in fact, very much as if: 「実際、まるで～の様に強く思われる」。It は漠然とした状況を表わす。as if (=as though) 仮定法形副詞節を誘導「まるで～である様に」。②whatever you like to call it: 「それを何と呼んでも結構であるが、兎に角その様な類のもの」。whatever は副詞節誘導の複合関係詞(譲歩)。③about which: 前置詞+関係代名詞「その様な事に就いて」。

**\*If they hadn't, they might, of course, fight like animals, but they couldn't quarrel in the human sense of the word. 【視訳】**もし彼等が(その様な類の法や規則を心に)持っていなければ、彼等は、当然、喧嘩をするであろう、動物の様に。然し彼等は口論する事は出来ないのである、人間的な意味合いで。【語注】①If they hadn't: 直後にin mind some kind of Law or Rule of fair play or decent behavior or morality or whatever you like to call it が省略。②in the human sense of the word: 副詞句(理由、条件)「人間的な意味合いで」。

**\*there'd be no sense in trying to do that unless you and he had some part of agreement as to what Right and Wrong are. 【視訳】**無意味であろう、その様な事をしようとしても、もしあなたと彼とが或る種の同意を持たなければであるが、その同意とは善悪に就いての考え方である。【語注】①there'd be no sense in: 「～に意味は無いであろう」。there'dはthere wouldの短縮形、仮定法過去形の帰結節。②unless you and he had: 「もしあなたと彼が～を持たなければ」。仮定法過去形の条件節。接続詞 unless は現実的な可能性を持った否定的条件節を誘導する「～しない限りは」。現実性の無い否定的な仮想はif~notを使う。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列挙する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を( )内の算用数字で表わす。

quar-rel-ling(1), un-plea-sant(2), im-port-ant(2), or-ange(1), prom-ise(1), ed-u-cat-ed(1), un-ed-u-cat-ed(2), grown-up(1), in-ter-est(1), re-mark(2), be-hav-ior(2), ap-peal-ing(2), stan-dard(1), ex-pect(2), re-ply(2), ex-cuse(2), pre-tend(2), dif-fer-ent(1), par-tic-u-lar(2), de-cent(1), mo-ral-i-ty(2), a-gree(2), an-i-mal(1), un-less(2), a-gree-ment(2), foot-ball-er(1), com-mit-ted(2)



## 単元6. 物を忘れる方法 *The Art of Forgetting* by Robert Lynd

【著者略歴】 **Robert Wilson Lynd (1879-1949)** : アイルランド作家、随筆家、批評家。英国クイーンズ大学卒。代表著書『Irish and English (1908)』、『Home Life in Ireland (1909)』。

### 1. 【視訳】と【語注】

**NB (Nota Bene = L. Note Well)** : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\***it seems to be taken for granted that the more things we remember the happier we are.** 【視訳】 次の事が当然の事であると思われている様である。即ちより多くの事柄を記憶すればする程、より幸せに私達は成ると言うのである。【語注】 ① **it seems to be taken for granted that** : 「～と言う事は当然であると思われている様である」。it は仮主語、that 以下が真主語。be taken for granted は熟語「当然であると考えられる」。② **the more things we remember the happier we are** : 『the+比較級、the+比較級』の慣用的な相関連語構文「より多くを記憶すればする程、その程度に呼応してより幸せに私達は成る」。最初の the は関係副詞「～の程度まで」、次の the は指示副詞「その程度だけ」と言う照応関係である。

\***I am sure forgetfulness also plays a part in making human beings happy.** 【視訳】 私は次の事を確信している。即ち忘れっぽい事も又一つの役割を果たしていると言う事である。それは人を幸せにする事も在る。【語注】 ① **I am sure** : 「～と言う事を確信している」。sureの直後に名詞節誘導の接続詞 that が省略されている。② **forgetfulness** : 「忘れっぽさ」。-ful と -ness は共に接尾語であるが、前者は名詞、動詞、形容詞に付加して「～に満ちた、～の性質を持つ、～する傾向が在る」と言う意味の形容詞を造語する。後者は形容詞や分詞に付加して「性質、状態、程度」表わす名詞を造語する。③ **in making human beings happy** : 「人を幸せにすると言う点に於いて」。making は動名詞で前置詞 in の目的語。make ~ happy は連語的構文「～を幸せにする」。human beings は動物に対する一般的な「人」、man は総称的に「人間」、mankind は集合的に人類、people は一般的な人々を意味する。

\***Macbeth and Lady Macbeth would have given a good deal to be able to forget the murder of Duncan.** 【視訳】 マクベス夫妻が支払ったであろう対価は膨大なものに成ったであろう。若し忘れる事が出来るならばであるが、それはダンカンの殺害である。【語注】 ① **Macbeth and Lady Macbeth** : 「マクベス夫妻」。William Shakespeare (1564-1616、英国の劇作家) の四台悲劇の一つ『Macbeth (1805-6)』では同夫妻が従兄のダンカン一世を殺害して王位を奪う。② **would have given a good deal** : 仮定法過去完了形の帰結節「膨大な対価を支払ったであろう」。③ **to be able to** : 「～する事が出来るならば」。仮定法過去完了形の条件節の意味合い。従って実際は「～を忘れる事が出来たならば」と言う意味合いに成る。

\***many a politicians has longed to be allowed to forget his election pledges.** 【視訳】 多くの政治家達が長年に亘って願って来た事は、許してもらって忘れる事であった、選挙公約をである。【語注】 ① **many a** : 「多くの～」。慣用的な連語。② **has longed to** : 「ずっと～する事を願って来た」。現在完了形 (継続)、動詞 long には継続の意味合いが含蓄されているので現在完了進行形は使わない。③ **be allowed to** : 受動態連語「～する事が許される」。

\***those who cannot forget injuries inflicted on them in the past.** 【視訳】 ～は次の様な人々である。即ち傷を忘れる事が出来ない人達である。その傷は過去の傷なのだが。【語注】 ① **those who** : = those people who 「～である所の人々」。視訳では関係代名詞 who の直前で区切る。② **cannot forget injuries inflicted on them** : cannot forget は短期記憶保留にして先に injuries を把握「傷を忘れる事が出来ない」。過去分詞 inflicted は修飾後置形式の形容詞で後部から前出語 injuries を修飾。視訳ではこの様な過去分詞の直前で区切る。

\***Others are equally miserable because they cannot forget wrongs they have done others.** 【視訳】 他の或る人は同じ様に惨めな思いをしている。何故ならば彼等は忘れる事が出来ないのである。悪事をであるが、それは彼等が他人に対して行った行為である。【語注】 ① **Others** : 「又或る他の人は」前文の主語 Some of the unhappiest people と照応的な相関関係の語である。② **wrongs they have done others** : 「彼等が他人に対して行った悪事」。Wrongs の直後に関係代名詞 which (目的格) が省略されている。

\***Human beings are so constituted, indeed, that they forget the things they would like to remember, and remember the things they would prefer to forget.** 【視訳】 人間には次の様な体質が在る、実際的に。即ち忘れてしまう事柄は記憶しておきたいと思う物ばかりであり、記憶している物は忘れたと思う物ばかりである。【語注】 ① **Human beings are so constituted that** : 「人間は～する様な体質である」。so...that～ は慣用的な相関関係構文「～する様にその程に...である」。動詞 constitute は「(体質的に)～である」と言う意味。② **they forget the things they would like to remember** : 「覚えて置きたい事柄を忘れる」。the things の直後に関係代名詞 which が省略。③ **the things they would prefer to forget** : 「忘れたと思う事柄を」。the things の直後に関係代名詞 which が省略されている。

\***the press has recently been turning its attention to the art of forgetting.** 【視訳】 報道機関が最近視点を変えて注目を忘却術に向けている。【語注】 ① **the press** : 「報道機関」。その他、集合的に報道界、出版物、定期刊行物、新聞、雑誌を表わす。② **has recently been turning its attention to** : 「注目を最近～に向けている」。has been turning は現在完了進行形で動作の継続を表わす。尚、recently の様な「時」を表わす副詞は原則的に動詞の直前か助動詞の直後に置かれる。

\***a great newspaper has gone so far as to publish an article on the subject, 'How to Forget Him in a Week.'** 【視訳】 或る

有名新聞が次の様な事まで行った。即ち記事を書いてその様な問題を取り上げたのである。題名は「彼を忘れる方法、然も1週間で」であった。【語注】①has gone so far as to publish : 「～を出版さえした」。go so far as to は連語的慣用表現「～までする(努力、手段、程度)」の現在完了形(完了、結果)。②publish an article on the subject : 「～と言う主題に就いて記事を書く」。

\* in which she suggested to another lady an alternative method of forgetting him referred to. 【視訳】 その手紙の中で、彼女が提案したのは、別の女性に対する別の方法であった。即ち「彼を」忘れる方法である。勿論話題の彼の事である。【語注】①, in which : 「その手紙の中で」。前置詞+関係代名詞、先行詞は前出語句 a very interesting letter である。②him referred to : 「話題にされている『彼』」。過去分詞 referred は修飾後置形式の形容詞的用法である。

\* is still in its fancy. 熟語「～は未だ未熟である」。

\* her suggestions may be worth quoting. 【視訳】 彼女の提案はここに引用する価値が在るだろう。【語注】①may : 可能性「～であり得る」。②be worth quoting : 熟語 (= worth while to quote) 。

\* Try to pick a funny film, nothing too romantic. 【視訳】 面白い映画を選びなさい。余りロマンティック過ぎるものは避けなさい。【語注】①Try to pick : 「選びなさい」。②nothing too romantic : 修飾後置形式の形容詞句で並列記述挿入であり、前出語句 a funny film を付加説明している。尚、単語「-thing」は、形容詞を従える。

\* unless Miss X is one of those people who do not find the Marx Brothers' funny. 【視訳】 但しXさんが次の様な人でなければの話である。即ちマルクス兄弟を面白いとは思わない類の人である。【語注】①Miss X : 手紙を受け取った女性。②one of those people who do not find : 「～だとは思わない類の人」。視訳では関係代名詞 who の直前で区切る。do not find は短期記憶保留、先に the Marx Brothers' funny を把握する。

\* any one who can forget a broken heart would be well advised to go. 【視訳】 誰でも次の様な人、即ち失恋を忘れる事が出来る人ならば、行く事を強くお勧めする。【語注】①any one who can forget a broken heart : 「失恋が忘れられる様な類の人であれば」。条件節の意味合いが含まれている。can forget は短期記憶保留、先に a broken heart を把握。②would be well advised to go : 「行く事を強く勧められるだろう」。仮定法過去形の帰結節の意味合い。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列挙する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を ( ) 内の算用数字で表わす。

mem-o-ry(1), now-a-days(1), re-mem-ber(2), plea-sure(1), cer-tain-ly(1), for-get-ful-ness(2), Mac-beth(2), poli-ti-cian(3), in-gur-ry(1), in-flict(2), e-qual-ly(1), mis-er-a-ble(1), con-stit-ute(1), in-deed(2), pre-fer(2), o-ver-come(3), weak-ness(1), re-cent-ly(1), news-pa-per(1), un-for-tu-nate-ly(2), al-ter-na-tive(2), in-foan-cy(1), cin-e-ma(1), ad-vice(2), ad-mis-sion(2)

## 単元8. 読書論 *On Reading in Relation to Literature* by Lafcadio Hearn

【著者略歴】 **Patrick Lafcadio Hearn (1850-1904)** : 小説家、紀行文作家、随筆家、日本研究家、元新聞記者。1896年日本国籍取得、「小泉八雲」と名乗る。英国セント・パーツ校中退。1859年渡米、1890年米国出版社通信員として来日、現島根県立松江北高等学校と島根大学で英語教師、翌年、松江士族の娘小泉セツと再婚、その後、熊本大学、東京大学、早稲田大学等で務めた後、神戸で英字新聞記者、その間に執筆活動開始、怪談や評論等多数発表、1904年狭心症で死去（54歳）。代表作品『骨董（1902）』、『怪談（1904）』。

### 1. 【視訳】と【語注】

**NB (Nota Bene = L. Note Well)** : 訳文は「**FIFO (入力順呼び出し法)**」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「**規範文法 (Prescriptive Grammar)**」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\* **nor should we buy any others, unless we have some special reason for so investing money.** 【視訳】又、買うべきでないのはそれ以外の本であるが、もし特別な理由が無ければである。その様に投資する理由がである。【語注】① **nor should we buy** : 「私達は又～を買うべきではない」。副詞 **nor** は否定節 (**not, no, neve** 等を含む節) の後に用いて、否定の連続を表わす。しかしこの文の前文は形式的には否定文ではないが、否定的な意味合いを含蓄しているので **nor** が使われている。尚、**nor** に釣られて助動詞が直後に従い「文倒置 (Inversion)」が起きている。② **any others** : 「その他の如何なる本も」。名詞としての複数形 **others** は「他人」と言う意味。③ **unless** : 接続詞「もし～でなければ (可能性の範囲内)」。可能性の少ない場合は **if ~ not** を使う。

\* **The second fact demanding attention is the general character of the value that lies hidden within all such great books.** 【視訳】第二の事実は、注意が必要であるが、次の様な一般的な特徴である。即ち価値の特徴であり、隠れて潜んでいるものである。全てこの様な偉大な本の中にある。【語注】① **The second fact** : 「第一の事実」。実は「**The first fact (第一の事実)**」は原文ではこの文章の前に記載されているのだが、ここでは割愛されて引用されていない。② **demanding attention** : 現在分詞の修飾後置形式形容詞である。後方から前出語句 **The second fact** を修飾している。視訳ではその直前で区切って情報把握をする。③ **that lies hidden within all such great books** : 「全てこの様な偉大な本の中に隠れて潜んでいる所の」。関係代名詞 **that** の先行詞は **the general character of the value** である。

\* **A great book is not apt to be comprehended by a young person at the first reading except in a superficial way.** 【視訳】優れた本は次の様には成らないものである。即ち理解されそうにないと言う事である。若い人達に依って一読ではである。然し表面的な理解は可能であろう。【語注】① **is not apt to** : 慣用的連語「～する傾向が無い、～し勝ちではない」。② **at the first reading** : 「一読で」。③ **except in a superficial way** : 「表面的な理解は除いて」。前置詞 **except** は不定詞や副詞句や節を従えて「～以外は、～を除いて」と言う意味。

\* **Only the surface, the narrative, is absorbed and enjoyed.** 【視訳】単にその本の表面的なもの、即ちその物語の筋だけが理解され楽しめるのである。【語注】① **Only the surface, the narrative** : 「単にその書物の表面的なもの、即ちその物語の筋だけ」**the narrative** は前句 **the surface** の付加的説明の為の並列記述挿入句。② **is absorbed** : 「理解される」。英語の単語は包摂性が大きく文脈に呼応して意味の拡大が可能であり、多義性が派生する。動詞 **absorb** の原義は「吸い取る」であるが、意味拡大をして「理解する」と言う意味合いを持たせる。この様な表現技法を既に言及した通り「**メタファー拡張 (Meta-phorical Expansion)**」と言う。

\* **No young man can possibly see at first reading the qualities of a great book.** 【視訳】若い人は恐らく理解する事は出来ないであろう。一読で、優れた本の質を。【語注】① **No young man can possibly see** : 「**No + 名詞**」を主語や目的語として完全否定の意味合いを表現するのは英語の特徴である。【類語】**no one, none, nobody, nothing** 等である。副詞 **possibly** はしばしば助動詞 **can** と共に用いて「恐らく～する事が出来ない、出来る」と言う意味を表わす。② **qualities** : 「特質、特性、特色、才能」と言う意味の場合は可算名詞として扱う。一方「良質、優良性、高級」と言う意味では不可算名詞である。

\* **Remember that it has taken humanity in many cases hundreds of years to find out all that there is in such a book.** 【視訳】次の事を思い起して欲しい。即ち人類に費やさせた多くの場合の何百年もの歳月をである。その様な年月を経て、人類は次の様な全ての事柄に気付いたのである。即ち含蓄されている全ての事柄であるが、その様な偉大な本の中に在るものである。【語注】① **Remember** : 命令文 (文頭に動詞) 「～を思い起しなさい」。この動詞には「～を記憶する」と言う意味もある。② **it has taken humanity ~ hundreds of years to find out** : 人が何かをするのに必要な時間を表わす慣用的連語「～する為に人間に…の時間を費やさせた」。③ **to find out** : 不定詞の副詞的用法 (目的) 「～を発見する為に」。視訳では不定詞の直前で区切り「その目的は～する事である」とする。

\* **according to a man's experience of life, the text will unfold new meanings to him.** 【視訳】人の人生経験に応じて、その本が次の事柄を示してくれるのである。即ち新しい意味合いである。【語注】① **according to** : 慣用的前置詞句「～に応じて」。② **will unfold** : 「～を示すものである」。助動詞 **will** は習性を表わす。

\* **The book that delighted us at eighteen, if it be a good book, will delight us much more at twenty-five, and it will prove like a new book to us at thirty years of age.** 【視訳】その本、実はその本が私達を喜ばせたのは18歳の時であったが、もしそれが優れた本であるならば、喜ばせる度合いは遥かに強いものに成るであろう、私達が25歳に成った時には、そして更にその

本は新書のように思われるであろう、私達が30歳に成った時には。【語注】①The book ~, if it be a good book, will delight us much more at twenty-five : 仮定法現在形で未来に於ける単なる仮想を表わす。この表現は現代英語では殆ど使われず直説法が代用される。即ち if it is a good book と成る。much more の much は比較級 more を強調する副詞。②it will prove like a new book to us : 仮定法現在形の帰結節。prove like は連語「実際に~であるかの様に思わせる」。

\*At forty we shall re-read it, wondering why we never saw how beautiful it was before. 【視訳】40歳で私達はその本を再読するであろう。そして次の様に不思議に思うであろう。即ち何故に全く分からなかったのだろうか、如何に美しい本であるかと言う事を、以前には。【語注】①re-read : re-は接頭語「再び」と言う意味。現在はハイフンが脱落して1語である。②, wondering : 分詞構文(付帯状況)「そして~を不思議に思う」。③why : 疑問詞で名詞節を誘導「何故~なのかと言う事」③how : 副詞で形容詞 beautiful を修飾し名詞節を誘導「如何に~であるかと言う事」。

\*It was the discovery of this extraordinary fact by generations of people long dead that made the greatness of such works as those of Shakespeare, of Dante, or of Goethe. 【視訳】それは次の様な事の発見であった。即ちこの非凡な素晴らしい事実の発見であるが、幾世代にも亘る人々に依るものであった。然も死後長い年月を経ての発見である。その様な発見に依って次の様な作品の偉大性が確立されたのである。即ちシェクスピアやダンテやゲーテの作品である。①It was~ that... : 強調構文。②long dead : 慣用句「死後長い年月を経て」。慣用的副詞で現在は1語。③Shakespeare : 「シェクスピア」。William Shakespeare, 1564-1616、イギリスの劇作家、詩人。代表作品『Macbethマクベス(1606)』。④Dante : 「ダンテ」。Dante Alighieri, 1265-1321、イタリア詩人、哲学者、政治家。代表作品『La Divina Commedia 神曲(1307-2)』。⑤Goethe : 「ゲーテ」。Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832、ドイツの詩人、劇作家、小説家、自然科学者、政治家、法律家。代表作品『Die Leiden des jungen Werther若きウエルテルの悩み(1774)』。

\*A young man finds a very serious reading in them; a middle aged man discovers an extraordinary depth in their least utterance; and an old man will find in them all the world's philosophy, all the wisdom of life. 【視訳】若い人が発見するのは非常に真面目な学識であるが、それ等の話の中に於けるである。中年の人が発見するのは非凡な深さであるが、実際にはその様な事は殆ど語られていないのである。そして高齢者が発見するものは、それ等の話の中で、全ての世界に於ける哲学である。即ち全ての人生に於ける知恵である。【語注】①A very serious reading : 「非常に真面目な学識」。readingは「書物の中の学識や知識、見解」である。②an extraordinary depth in their least utterance : 「作品の中に於いては殆ど語られていない非凡な深遠さ」。in their least utterance は「それ等の作品の中では殆ど語られていない状況の中に於ける」。Least は副詞 little の最上級(劣等比較)。③, all the wisdom of life : 並列記述挿入句で前出語句 all the world's philosophyの付加説明句である。

\*If one is very dull, he may not see much in them, but, just in proportion as he is a superior man, and in proportion as his knowledge of life has been extensive, so will he discover the greatness of the mind that conceived them. 【視訳】若し人が非常に鈍感であれば、発見する事が出来ないかも知れない、それ等の作品の中の多くを。然しきちんと比例して、その人が優れている人間であればある程に、そして又比例して、人生の知識が広範囲に亘っていればいる程に、その人は発見するであろう、ゲーテの偉大さを。ゲーテはその様な話を創り出した人なのである。【語注】①just in proportion as he is a superior man : 「読者が優れた人であればある程に、きちんとそれに比例して」。②as his knowledge of life has been extensive : 「その人の人生知識が広いものであればある程に、それに比例して」。③, so will he discover the greatness of the mind that conceived them : 「その程度に比例して、その人、即ち読者は発見するであろう、ゲーテの偉大性を。ゲーテはその様な話を創り出した人なのである」。the mind は Goethe であり、them はゲーテが創作した話である。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列举する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を ( ) 内の算用数字で表わす。

in-vest-ing(2), de-mand-ing(2), char-ac-ter(1), im-mor-tal(2), com-pre-hend(3), su-per-fi-cial(3), sur-face(1), ab-sorb(2), pos-si-bly(1), hu-man-i-ty(2), ex-pe-ri-ence(2), beau-ti-ful(1), ex-act-ly(2), pro-portion(2), dis-cov-er-y(2), ex-tra-or-di-nar-y(2), gen-er-a-tion(3), great-ness(1), il-lus-tra-tion(3), se-ri-ous(1), ut-ter-ance(1), phi-los-o-phy(2), wis-dom(1), su-pe-ri-or(2), knowl-edge(1), ex-ten-sive(2), con-ceive(2)

## 単元13 経済の領域と方法

### The Scope and Method of Economics by Alfred Marshall

【著者略歴】 Alfred Marshall (1842-1924) : 英国経済学者、新古典派経済学の代表的研究者、元ケンブリッジ大学教授。ケンブリッジ大学卒。主著『Principles of Economics (1890)』。

#### 1. 【視訳】 と 【語注】

NB (Nota Bene = L. Note Well) : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\*There are some who hold, with Comte, that the scope of any profitable study of man's action in society must be coextensive with the whole of social science. 【視訳】 或る人は次の様に主張する。即ちコントも同じ見解であるが、如何なる実在する研究領域も、人間の社会行動に就いての研究の場合は、次の事と同一の領域でなければならないと言うのである。即ち全社会科学との同一性である。【語注】 ①hold that, with Comte, that : 「コントがそうであった様に、～でなければならないと言う主張を心に抱く」。動詞 hold は文語的表現「～を心に抱く」。接続詞 that は名詞節誘導。with Comte の前置詞 with は「同一見解」を表わす。Comte (Auguste Comte, 1798-1857) はフランス哲学者、実証主義哲学の唱道者、社会学の創始者である。②must be coextensive with : 慣用的連語「～と同一でなければならない」。

\*they urge on economists to abandon their distinctive role and to devote themselves to the general advancement of a unified and all embracing social science. 【視訳】 その様な人達は経済学者に次の様に勧めるのである。即ち個別的な役割は捨て去って、献身すべきは一般的な発展であると言う。その一般的な発展とは統一された包括的な社会科学の発展である。【語注】 ①urge on ~ to : 慣用的連語「～に～する事を勧める」。②to devote themselves to : 慣用的連語「～に献身する」。③the general advancement of a unified and all embracing social science : 「統一された包括的な社会科学の一般的な発展」。all embracing は「全てを包含している」と言う原義から「包括的な」と言う意味拡張が可能である。

\*the whole range of man's actions in society is too wide and too various to be analysed and explained by a single intellectual effort. 【視訳】 人間の行動の全領域は、但し社会に於ける行動であるが、それは非常に幅広く多様であるので分析したり説明したりする事は不可能である。特に一つの知的な努力に依ってそうする事は出来ないのである。【語注】 ①the whole range of man's actions : the whole range は短期記憶保留にして先に of 以下を把握する。②is too wide and various to : too ~ to は慣用的連語「非常に～なので～する事が出来ない」。

\*Comte himself and Herbert Spencer have brought to the task unsurpassed knowledge and great genius. 【視訳】 コント自身とハーバート・スペンサーが捧げたその仕事に対する貢献は卓絶した知識と偉大な天賦の才能であった。【語注】 ①Herbert Spencer : 1820-1903、英国哲学者、社会学者、倫理学者。代表著書『System of Synthetic Philosophy (1870)』。②have brought to : 「～に…を捧げた」。動詞broughtの慣用的連語。③the task : 「社会の全領域に於ける人間行動の分析」と言う仕事。④句読点セミコロン (;) : 等位接続詞的機能で複数の独立文を結ぶ「そして、しかし、と言うのは、更に」等の意味。

\*but they can hardly be said even to have made a commencement with the construction of a unified social science. 【視訳】 然し彼等は殆ど次の様にさえも言われていない。即ち端緒を作ったと言う事さえもであるが、それは構築の端緒であり、統一された社会科学のそれである。【語注】 ①can hardly be said even to have made : 「～を作ったとさえも殆ど言われていない」。副詞 hardly は不完全否定副詞。【類語】 seldom, scarcely, rarely等。原形完了不定詞 to have made はその文の叙述動詞の時制より一つ前の時制を意味する。従ってこの文脈では叙述動詞 can hardly be said が現在形なので、一つ前の時制、即ち過去形の意味合いである。②have made a commencement with : 慣用的連語「～を開始する」。英語は名詞中心の表現を好む言語なので動詞を名詞化して make を使う名詞化表現を多用する。【類似表現】 make a walk (散歩する)、make an appointment (約束する)、make a change (変更する)、make a choice (選択する)、make a decision (決定する)、make a demand (要求する)、make a guess (推測する)、make a mistake (間違えをする)等。

\*The physical sciences made slow progress so long as the brilliant but impatient Greek genius insisted on searching after a single basis for the explanation of all physical phenomena. 【視訳】 物理学は緩慢な進歩を遂げたが、それは次の様な期間中の事であった。即ち優秀ではあったが性急なギリシアの天才達が強情に次の様に言い張っていた期間中であったのだ。即ち彼等が強情に探求するとしたのは単一の基礎であり、それに基づいて説明し様としたのである、全ての物理現象をである。【語注】 ①made slow progress : 動詞makeの慣用語、英語の特徴「名詞化表現」の現れである。尚progressは不加算名詞で通常無冠詞である。②so long as : 慣用的接続詞句「～の期間中に」。③insisted on : 慣用的連語「～を主張した」。④searching after : 連語的動名詞句、前出語onの目的語「～を追及する事」。⑤phenomena : phenomenon の複数形。

\*their rapid progress in the modern age is due to a breaking up of broad problems into their component parts. 【視訳】 急速な進歩が近代に於いて為されたが、その誘因は分解した事であった。即ち広範囲に亘る諸問題をそれ等の構成部分へと分解したのである。【語注】 ①is due to : 慣用語 (熟語) 「誘因は～である、～が原因である」。②a breaking up of ~ into : 動名詞連語「～を…に細分する事」。

\*Doubtless there is a unity underlying all the forces of nature. 【視訳】 疑いも無く一つの統一性が在って、それが根底を成して、全ての自然界の力の下に横たわっている。【語注】 ①there is : 短期記憶保留、先に a unity 以下を把握する。②underlying

**all the forces of nature** : 現在分詞の修飾後置形式形容詞的用法、前出語 a unity を後方から修飾。

**\*whatever progress has been made towards discovering it, has depended on knowledge obtained by persistent specialized study, no less than on occasional broad surveys of the field of nature as a whole.** 【視訳】如何なる進歩が為されて来たにせよ、それはその統一性の発見に向けての進歩であるが、その進歩が依拠して来た知識は、次の様な努力によって獲得されたものである。即ち根気強い専門的な研究に依ってである。更にそれと同じ程度に時折の広範囲に亘る研究にも依拠して来たのであるが、その研究は自然界を全体として扱う研究であった。【語注】①**whatever progress has been** : 「如何なる進歩が為されて来たとしても」。Whatever は複合関係詞の形容詞的用法で譲歩節を誘導する (= no matter what)。②**it** : 「その統一性」。③**has depended on knowledge obtained by** : 「~に依って獲得された知識に依拠して来た」。この文の主語は明示されていないが、文脈から判断してthe progressである。④**obtained by** : 「~に依って獲得された」。過去分詞の修飾後置形式形容詞的用法で前出語 knowledge を後方から修飾。⑤**no less than** : 「~と同じ程度に」。並列記述挿入句を誘導する慣用的な前置詞句。

**\*similar patient detailed work is required to supply the materials which may enable future ages to understand better than we can the forces that govern the development of the social organism.** 【視訳】同じ様な忍耐強い詳細な研究が求められているが、その狙いは次の様な材料を提供し、次の事を可能にする材料である。即ち未来の世代がより良く理解する、我々よりもであるが、その様な材料であり力である。そしてその力が支配しているのは発展であり、社会的有機体の発展である。【語注】①**to supply** : 不定詞の副詞的用法(目的)「~を供給する為に」。視訳ではその直前で区切って「その目的は~する事である」とする。②**enable~to** : 慣用的連語「~に~する事を可能にする」。③**understand better than we can** : 「我々よりもより良く~を理解する」。better than は慣用的な比較表現接続詞句で副詞節を誘導する「~よりも良く」。④**the forces that...** : 前出動詞 understand の目的語。「...である所の力を(理解する)」。視訳では関係代名詞 that の直前で区切って把握。

**\*on the other hand it must be fully conceded to Comte that, even in the physical sciences, it is the duty of those who are giving their chief work to a limited field, to keep up close and constant correspondence with those who are engaged in neighboring fields.** 【視訳】他方、次の事で完全にコントを認めねばならない。即ち例え物理学に於いても、次の様な人々の義務、即ち主な仕事に限られた分野である人々の義務は、密接で絶え間の無い情報交換を次の様な人々と継続する事であると言う。即ち隣接分野を専門にしている人達との情報交換である。【語注】①**it must be fully conceded to Comte that** : 「コントに譲歩して...と言う事を完全に認めねばならない」。It は仮主語、真主語は接続詞thatが誘導する名詞節。concede to は「~に譲歩して認める」と言う意味。②**it is the duty of~to** : itは仮主語、to 以下が真主語。③**those who** : 「~している人々」。thoseは短期記憶保留にして who 以下を先に把握する。④**to keep up close and constant correspondence with** : 「~と緊密で絶え間の無い意見交換を継続する」。⑤**are engaged in** : 「~に従事している」。慣用的受動態連語。

**\*Specialists who never look beyond their own domain are apt to see things out of true proportion.** 【視訳】次の様な専門家達、即ち決して外を見ようとしない、自分達の専門分野ばかりを見ている人達には、次の様な傾向が在る。即ち物事を見る場合、完全に不調和な視線で見ると言う傾向である。【語注】①**never look beyond their own domain** : 「自分達自身の専門分野以外の事を決して見ない」。②**are apt to** : 慣用的連語「(本来的に)~する傾向が在る、~し勝ちである」。③**see things out of true proportion** : 「物事を完全な調和から外れた視線で見る」。out of true proportion は副詞句で前出動詞seeを修飾。

**\*much of the knowledge they get together is of comparatively little use.** 【視訳】多くの知識、それは既述の様な専門家達が獲得した知識であるが、比較的に殆ど役に立たないものである。【語注】①**they get together** : 接触形容詞節で直前に関係代名詞whichが省略、先行詞は前出語the knowledge。②**is of comparatively little use** : 「比較的に殆ど役に立たない」。of little use は「of+抽象名詞」で性質を表わす慣用的な形容詞句である。【類似表現】of importance (重要な)、of ability (有能な)、of character (人格の在る)、of letters (文学関係の)。

**\*They work away at the details of old problems which have lost most of their significance and have been supplanted by new questions rising out of new points of view.** 【視訳】その様な専門家達が精を出して取り組んでいる事柄は、詳細な古い問題であり、既に殆ど失って仕舞った意義しか持たない諸問題である。然もそれ等は既に取って代わられており、新しい諸問題が台頭して来ているが、それ等は新しい視点から生じて来ているものである。【語注】①**work away at** : 熟語「精を出して~に取り組む」。②**have lost** : 現在完了形(完了、結果)「~を失って仕舞って既に無い」。③**have been supplanted by** : 受動態の現在完了形(完了、結果)「~に依って既に取って代わられている」。④**rising out of new points of view** : 「新しい視点から生じている」。現在分詞の修飾語後置形式形容詞。後方から前出語句 new questions を修飾。視訳では直前で区切って把握。

**\*they fail to gain that large illumination which the progress of every science throws by comparison and analogy on those around it.** 【視訳】彼等が得られないものはその様な壮大な解明である。それは全ての科学の進歩が投げ掛けるものであり、比較と類推に依るものであるが、その様な全ての科学の進歩の周りに在る新しい諸問題に就いての比較と類推なのである。【語注】①**fail to** : 慣用的連語「~する事が出来ない」。②**that large illumination** : 「その様な壮大な解明」。that は指示形容詞「その様な」。③**by comparison and analogy on those around it** : 「全ての科学の進歩の周りに存在するその様な新しい諸問題に就いての比較と類推に依って」。指示詞thoseは既出名詞の複数形代用で new questions を示す。代名詞 it は既出語句 the progress of every science である。

**\*Comte did good service therefore by insisting that the solidarity of social phenomena must render the work of exclusive specialists even more futile in social than in physical science.** 【視訳】コントは立派な貢献をした事に成るのであるが、それは彼が次の様に主張したからである。即ち社会現象の結束は必ず次の様な結果を齎すと言うのである。即ち排他的な専門家達の

研究を一層無駄なものにすると言う事である。然も社会科学に於いてはである。物理学に於いてよりも。【語注】①the solidarity of social phenomena must render : 名詞化表現 the solidarity of social phenomena 「社会現象の結束」が第3文型 (SVO) の無生物主語である。英語ではこの様な名詞化表現を多用する。【類似表現】the severe regularity of her feature (彼女のくつきりとした顔立ち)、the hot stuffiness of her overheated compartment (暖房の効き過ぎたむんむんする個室寝台)、the accuracy of your understanding of the past (君が過去を正確に理解している) 等。②render~even more futile : 「~を一層無駄なものにする」。副詞 even は他の副詞を強調。

\*Mill conceding this continues—【視訳】ミルはこれを認めて次の様に続けて言った。【語注】①Mill : John Stuart Mill (1806-1873)、英国の哲学者、社会思想家、経済思想家。②conceding this : 分詞構文 (付帯状況) 「この事を認めて」。③continues— : 「次の様に続けて言う・・・」。句読点ダッシュ (—) は引用文の一部省略である。

\*A person is not likely to be a good economist who is nothing else. 【視訳】人は次の様な者には成り得ない。即ち立派な経済学者にはと言う事であるが、それは経済学者以外の何者でもない様な人物はと言う意味である。【語注】①is not likely to : 慣用的な連語「しそうにない」。形容詞 likely は実現性が大きい可能性を表わす。一方、possible は実現性が皆無ではない可能性である。②a good economist who is nothing else : 「他の何者でもない様な立派な経済学者」。その様な人物は立派な経済学者には成り得ないと言う言外の意味合いである。

\*Social phenomena acting and reacting on one another, they cannot rightly be understood apart. 【視訳】社会現象は作用したり、作用されたり、互いに行っているの、適切には理解され得ない、個々バラバラに切り離しては。【語注】①Social phenomena acting and reacting on one another : 意味上の主語が明示された分詞構文 (理由)。phenomena の単数形は phenomenon。

【類似名詞単複形】data>datum (データ)、strata>stratum (地層、階層)。②apart : 副詞「個々バラバラに切り離して」。

\*this by no means proves that the material and industrial phenomena of society are not themselves susceptible of useful generalizations, but only that these generalizations must necessarily be relative to a given form of civilization and a given stage of social advancement. 【視訳】この事は決して次の事を立証しているのではない。即ち物質的な産業的な社会現象それ自体が有益な一般化を受け入れないと言う事を示しているのではない。そうではなくて、単に次の事を示しているに過ぎないのである。即ちこれ等の一般化は必ず次の事柄と相関的に関係付けねばならないと言う事である。即ち或る一定の文明形態と或る一定の社会発展段階との相関関係である。【語注】①by no means : 否定副詞句「決して~しない」。②the material and industrial phenomena : 「物質的な産業的な社会現象」とは第二次産業である。③are not themselves susceptible of : 「それ自体~を受け入れる事が出来ない」。④, but only that : 「そうではなくて、単に~と言う事を示しているに過ぎない」。接続詞 but は文頭に在る否定副詞句 by no means との相関的連語。⑤must necessarily be relative to : 「必ず~に対して相関関係にあらねばならない」。⑥a given form of civilization : 「或る一定の文明形態」。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列挙する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を ( ) 内の算用数字で表わす。

prof-it-a-ble(2), so-ci-e-ty(2), co-ex-ten-sive(3), as-pect(1), con-nect(2), fu-tile(1), e-con-o-mist(2), a-ban-don(2), dis-tinc-tive(2), de-vote(2), ad-vance-ment(2), u-ni-fy(1), em-brace(2), var-i-ous(1), an-a-lyse(1), ex-plain(2), in-tel-tec-tur-al(3), ef-fort(1), un-sur-passed(3), ge-ni-us(1), ep-och(1), sur-vey(1), sur-ges-tive(2), com-mence-ment(2), con-struc-tion(2), phys-i-cal(1), prog-ress(1), bril-liant(1), im-pa-tient(2), in-sist(2), ex-pla-na-tion(3), phe-nom-e-na(2), rap-id(1), mod-ern(1), pro-blem(1), com-po-nent(2), un-der-ly-ing(1), ob-tain(2), per-sis-tent(2), spe-cial-ize(1), oc-ca-sion-al(2), sur-vey (1,2), sim-i-lar(1), de-tailed(1,2), sup-ply(2), ma-te-ri-al(2), un-der-stand(3), de-vel-op-ment(2), or-gan-ism(1), con-cede(2), phys-i-cal(1), con-stant(1), cor-re-spon-dence(3), neu-gh-bor-ing(1), spe-cial-ist(1), do-main(2), com-par-a-tive(2), sig-nif-i-cance(2), sup-plant(2), il-lu-mi-na-tion(4), com-pas-sion(2), a-nal-o-gy(3), sol-i-dar-i-ty(3), ex-clu-sive(2), con-tin-ue(2), in-dus-tri-al(2), sus-cep-ti-ble(2), gen-er-al-i-za-tion(5), nec-es-sar-i-ly(3), rel-a-tive(1), civ-i-li-za-tion (4)

## 単元15. 思想の自由

### A History of Freedom of Thought by John Bagnal Bury

【著者略歴】 John Bagnal Bury (1861-1927) : アイルランド歴史家、古典学者、中世ローマ歴史家、文献学者、元 Trinity College (Dublin) 教授、Cambridge University 教授、Trinity College 卒。代表著書『History of Greece to the Death of Alexander the Great (1900)』、『History of the Freedom of Thought (1914)』。

#### 1. 【視訳】 と 【語注】

NB (Nota Bene = L. Note Well) : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\*A man can never be hindered from thinking whatever he chooses so long as he conceals what he thinks. 【視訳】 人は決して阻害されずに考える事が出来る。如何なる事でも望み通りにである。但し公言しない限りである、自分が考えている事を。

【語注】 ① A man : 「一般的な人 (総称)」。【同意語】 man (総称的に)、people (世間一般の)、human (動物に対して)、one (不定的に)、a person (一般的に)、an individual (口語的に)、we (総称的に)、you (総称的に)。② never be hindered from -ing : 慣用的受動態連語「決して-する事を妨げられない」。③ thinking whatever he chooses : 「望む事は何でも考える事」。Thinking は動名詞で前置詞 from の目的語。whatever は複合関係代名詞 (強意)。④ so long as : 慣用的接続詞句 (= as long as) 「-する限りは (条件)」。短期記憶保留にして先に he conceals 以下を把握する。従ってここでは訳読法の「逆展開型情報処理法 (Inverted Process of Information)」を使う。但し工夫次第では巧みな視訳が可能である。⑤ he conceals what he thinks : 「考えている事を隠す」。関係代名詞 what は先行詞と関係詞を共有「~である所のもの」。

\*this natural liberty of private thinking is of little value. 【視訳】 この生得的な自由、即ち個人的な思考の自由は、殆ど価値が無い。【語注】 ① this natural liberty of private thinking : 「この生得的な自由」、即ち個人的な思考の自由は。ここでは「自由」と言う言葉を繰り返し使っているが、これは視訳に於ける語彙整合の骨である。natural は「生れ乍らに備わっている、生得的な」と言う意味。② of little value : 前置詞 of は抽象名詞を従えて形容詞句を構成する「価値が殆ど無い」。この事に就いては既に言及済みである。【類語】 of importance (重要な)、of ability (有能な)、of literature (文学的な)、of sense (気の付く)、of no use (役に立たない)。

\*Moreover it is extremely difficult to hide thoughts that have any power over the mind. 【視訳】 加えて、次の様にする事は極めて難しい事である。即ち思考を隠す事であるが、思考にはあらゆる力が在って、心に勝るのである。【語注】 ① it is extremely difficult to : 「it is ~to-」の慣用的構文「-する事は極めて困難である」。② thoughts that have any power over the mind : 「心に勝るあらゆる力をも持っている思考」。Mind は定冠詞 the を付けて「人の心、精神」を意味する。

\*If a man's thinking leads him to call in question ideas and customs which regulate the behavior of those about him, to reject beliefs which they hold, to see better ways of life than those they follow, it is almost impossible for him, if he is convinced of the truth of his own reasoning, not to betray by silence, chance words, or general attitude that he is different from them and does not share their opinions. 【視訳】 もし一人の人間の考えが導いて次の様な疑念を抱かせる様に仕向けるならばと仮定しよう。即ち先ず思考と習慣に対する疑念であるが、それは周りの人々の行動を規制している思考と習慣の事である。更に次の様な信念を拒絶する様に成ると仮定しよう。即ちその信念は周りの人達が抱いている信念である。そして更に今よりも優れた生活様式を求める様に成ると仮定しよう。その様に成れば、殆ど不可能に成るのが次の事柄である。然もその人間が確信を持って自分の論理思考の真実性を信じているならば、猶更、難しく成るであろう。即ち次の事を態度で示さない様にする事は殆ど不可能であると言う事である。即ち沈黙や、口滑らしや、日常の生活態度で、自分は彼等とは違うのだと言う事を、更には彼等の意見は認めないと言う事を漏らして仕舞って、思想自由の条件を破って仕舞わない様にする事は難しく成ると言う事である。

【語注】 ① leads him to call in question : 「~を疑問視する様に人を導く」。leads~to- は連語「~を-する様に誘導する」。call in question は慣用的連語「~に対して疑念を持つ」。② ideas and customs which regulate the behavior of those about him : 「その人間の周りの人々の行動を規制している思考や習慣」。関係代名詞 which の先行詞は ideas and customs。訳読では which の直前で区切って把握する。③ to call~, to reject..., to see- : これ等の不定詞は全て文頭部に在る動詞 leads に繋がる。従って「~に疑念を抱き、...を拒絶し、-を見る様に導く」と言う意味に成る。④ better ways of life than those they follow : 「彼等が基づいて生きている生活様式よりも優れた生活様式」。代名詞 those は同じ名詞句、即ち ways of life の反復回避の為の「反復代名詞」である。既出句 the behavior of those about him の those は people の反復代名詞。⑤ it is almost impossible for him, if he is convinced of the truth of his own reasoning, not to betray by~that... : 「うっかり~する事に依って、...と言う事を態度で漏らさない様にする事は殆ど不可能である」。not to betray by~ は真主語 (不定詞の名詞的用法)、仮主語は it である。

\*Some have preferred, like Socrates, some would prefer to-day, to face death rather than conceal their thoughts. Thus freedom of thought, in any valuable sense, includes freedom of speech. 【視訳】 或る人は次の事をこれ迄にずっと好んできた、ソクラテスと同じ様に。又或る人は今日でもその事を好むであろう。即ち死に向かう方がましであると言うのである。自分の思想を隠す位なら。その様に、思想の自由は、如何なる価値観に於いても、言論の自由を含んでいるのである。【語注】 ① have preferred : 現在完了 (継続) 「現在迄ずっと~を好んで来た」。動詞 prefer は不定詞を従える慣用的動詞連語「-する事を好



む」。②Socrates : BC469-399、古代ギリシアの哲学者。著述は無く弟子のプラトンやアリストテレス等の著作を通して知られている。③some would prefer : 仮定法過去形の帰結節「或る人は—する事を好むであろう」。④to face death rather than conceal : 「～を隠すよりはむしろ死に向かう」。Rather は副詞で rather than の形で名詞や原形動詞、不定詞、節等を従える。

\*We are so accustomed to it that we look on it as a natural right. 【視訳】我々は余りにもその事に慣れて仕舞っているので、我々の感覚ではそれを生得的な権利であると見做している。【語注】①are so accustomed to~that... : so~that の慣用的構文「～に余りにも慣れ過ぎていて、その結果・・・である」。be accustomed to は慣用的受動態連語「～に慣れている」。②look on it as : 慣用的熟語「それを～と見做す」。

\*this right has been acquired only in quite recent times, and the way to its attainment has lain through lakes of blood. 【視訳】この権利が獲得されたのは正に近年に於いてであり、その道程は達成迄に多くの血の湖を横切って来たのである。【語注】

①has been acquired : 現在完了形(完了、結果)「獲得されて現在は保有されている」。②has lain through lakes of blood : 「血の湖を横切って横たわっている」。動詞 lain は lie (横たわる) の過去分詞形。

\*Human societies (there are some brilliant exceptions) have been generally opposed to freedom of thought, or, in other words, to new ideas 【視訳】人間社会は(幾つかの輝かしい例外は在るが)これ迄ずっと一般的に反対されて来た、思想の自由に対しては、即ち他言すれば、新しい考えに対して反対されて来たのである。【語注】①have been generally opposed to : 慣用的な受動態連語の現在完了形(継続)「ずっと一般的に～に対して反対されて来た」。②or : 接続詞「即ち、所謂」。

\*it is easy to see why. 【視訳】容易に理解する事が出来る、その理由は。【語注】①it is~to : itは仮主語、真主語はto以下。不定詞の名詞的用法。②why : 疑問詞で名詞節誘導、直後に前文 human societies have been generally opposed to freedom of thought が省略されている。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列挙する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第一強勢が置かれている音節を ( ) 内の算用数字で表わす。

con-ceal(2), ex-pe-ri-ence(2), i-mag-i-na-tion(4), lib-er-ty(1), pri-vate(1), un-sat-is-fac-to-ry(4), per-mit(2), com-mu-ni-ca-tive(2), ob-vi-ous-ly(1), more-o-ver(2), ex-treme-ly(2), dif-fi-cult(1), reg-u-late(1), be-haviour(2), im-pos-sible(2), con-vince(2), si-lence(1), be-tray(2), at-ti-tude(1), o-pin-ion(2), pre-fer(2), free-dom(1), in-clude(2), pres-ent(1), civ-i-lized(1), per-fect-ly(1), ac-cus-tomed(2), re-cent(1), at-tain-ment(2), per-suade(2), en-light-ened(2), dis-cuss(2), so-ci-e-ty(2), bril-liant(1), ex-cep-tion(2), gen-er-al-ly(1), op-pose(2)

## 単元16. 二十年後 *After Twenty Years* by O. Henry

【著者略歴】 O. Henry (1862-1910) : 米国の小説家。数々の転職。1898年オハイオ銀行横領罪で懲役8年の有罪判決、獄中数編の作品出版、1901年釈放、作家活動継続、その後ニューヨークへ単身転居、執筆活動活発化、1910年肝硬変死去。代表作『The Last Leaf(1906)』、『The Gift of the Magi(1906)』。

### 1. 【視訳】 と 【語注】

NB (Nota Bene = L. Note Well) : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\* with collar turned up to his ears. 【視訳】襟を立てて両耳に届く状態で。【語注】①with~過去分詞 : 前置詞 with の付帯状況用法。「~が~された状態で」。②turned up to : 慣用的連語「~まで立てて」。

\* hurried across from the opposite side of the street 【視訳】急いで横切って渡って来た、道路の向こうから。【語注】①across from : 「~から横切って」。複数の前置詞が重ねられた表現はしばしば見受けられる。【類例】from behind the curtain (カーテンの裏から)、from among the words below (下の単語から)、as to these expressions (これ等の表現に就いて)、as for me (私に関しては)。through to the manager (マネージャーに繋いで)。②the opposite side of the street : the opposite side は短期記憶保留にして先に of 以下を把握する。尚、of-phrase の把握の仕方に就いては既に言及済みである。

\* Bless my heart! : 祈願、驚き、喜び、立腹 (反語的) 等を表わす慣用的表現「これは、これは!」。【類似表現】Bless me!, God bless me!, Bless my soul!, Bless the boy!, Bless you!

\* grasping both the other's hands with his own. 【視訳】握り締めた、相手の両手を自分の手で。【語注】①grasping : 現在分詞の分詞構文 (付帯状況) 「そして~を握り締めた」。②with his own : = with his own hands 「自分自身の手で」。

\* It's Bob, sure as fate. I was certain I'd find you here if you were still in existence. 【視訳】ボブだ、間違い無く。僕は確信していたよ。君に逢えるだろうと、ここで。もし君が未だ生きていたら。【語注】①sure as fate : = as sure as fate (death/a gun/nails) 慣用的同等比較比喩的表現「~と同じ様に確かに、間違い無く」。②I'd find you here if you were still in existence : 仮定法過去形 (現在の事実の反対の仮想)。

\* Well, well, well — twenty years is a long time. 【視訳】やれ、やれ、やれ、二十年とは実に長い時間だね。【語注】①Well, well, well : 間投詞 (喜び、安心)。②twenty years is : 「二十年」を一つの纏まった概念として捉えて単数扱い。

\* The old restaurant's gone, Bob. 【視訳】あの昔馴染みのレストランはもう無くなって仕舞ったよ、ボブ。【語注】①old : 「昔馴染みの」。②restaurant's gone : = restaurant is gone. 完了形は物理的な移動や質的变化を表わす動詞 (go, come, rise, set, fall, grow, shut 等) の場合は状態に重点が置かれて「Be動詞+過去分詞」の特殊形に成る。【類似表現】Summer is gone. (もう夏ではない)、He is come. (彼は来ている)、The sun is set. (太陽はもう出ていない) 等。

\* I wish it had lasted, so we could have had another dinner there. 【視訳】願わくばあのレストランが在ったら良かったのだが。そうしたら又一緒に食事が食べれたのに。【語注】①I wish it had lasted : 仮定法過去完了形 (過去の事実の反対の仮想)。I wishは願望を表わす。②we could have had another dinner there : 仮定法過去完了形の帰結節「~する事が出来たのに (実際は出来なかった)」。

\* How has the West treated you, old man? 【視訳】西部はどうだったかね、君? 【語注】①the West : 無生物主語「西部は君をどの様に扱ったか? (西部はどうだったか?)」。無生物主語の表現は英語では多用される。人間以外の抽象的な概念や観念、物事、状況等を主語にする第3文型の表現である。一方、日本語は人間や意思を持った生物を主語にして、事物全体が自然にその様に成ったと言う主観的な「状況密着型」の表現を好む。【例文】The following morning saw us wending our way to the flat. (E. Hemingway: *The Old Man and the Sea*) 「翌朝、私達はゆっくりと浅瀬に向って歩いて行った」。実線下線部が無生物主語である。②old man : 親しみを込めた呼びかけ「君、お前」。

\* Bully; it has given me everything I asked it for. 【視訳】素晴らしかったよ。西部は何でも全ての物を与えてくれたよ、僕の求める物は何でも。【語注】①Bully : 間投詞「素晴らしい、上手い、見事」。②everything I asked it for : everything の直後に関係代名詞 that が省略されている。

\* you are so tall by two or three inches. 【視訳】君は僕と比べてそんなに背が高かったんだね、2、3インチ程も。【語注】①by two or three inches : 前置詞 by は「程度、差異、範囲」を表わす。

\* Doing well in New York, Jimmy? 【視訳】上手くやっているかね、ニューヨークでは、ジミー? 【語注】①Doing well : = Have you been doing well~? 現在完了進行形 (動作の継続)。

\* Come on, Bob, we'll go around to a place I know of, and have a good long talk about old times. 【視訳】さあ、ボブ、行こう。或るいい場所を僕は知っているんだ。そこでゆっくり話そうじゃないか、昔の事を。【語注】①Come on : 促し「さあ」。②go around to : 慣用的連語「~に立ち寄る」。③a place I know of : I know of は接触形容詞節、関係代名詞 which が place の直後に省略されている。

\* The two men started up the street, arm in arm. 【視訳】二人の男達は通りを歩き始めた、仲良く腕を組んで。【語注】①started up the street : started は短期記憶保留にして、先に up the street を把握する。前置詞 up (= along) は「~に沿って、~の道路を」②arm in arm : 慣用的副詞句「仲良く腕を組んで」。

\*The man from the West, his egotism enlarged by success, was beginning to outline the history of his career. 【視訳】 その男は西部からやって来たのだが、うのぼれが大きく成って、それ程成功したので、次の様な事をし始めた。即ち自分の過去の経歴に就いて概略説明をし始めたのである。【語注】①his egotism enlarged by success : 意味上の主語が明記された過去分詞の分詞構文(付帯状況)、enlarged の直前に being が省略されている。「うのぼれが、成功した事で、大きく成って仕舞って」。egotism は「うのぼれ、独りよがり」。

\*The other, submerged in his overcoat, listened with interest. 【視訳】 もう一人の男は、コートに深々と覆い被さって、興味深く聴いていた。【語注】①submerged in his overcoat : 過去分詞の分詞構文(付帯状況)「外套に深々と覆い被さった状態で」。②listened with interest : listenedは短期記憶保留、先に with interest を把握する。

\*At the corner stood a drug store, brilliant with electric light. 【視訳】 角には一軒の薬屋が建っていたが、こうこうと明るく電燈が灯っていた。【語注】①At the corner stood a drug store : 文倒置(= a drug store stood at the corner)。②brilliant with electric light : 現在分詞 being が省略されている分詞構文(付帯状況)「電燈の灯で明るく輝いていた」。

\*but not long enough to change a man's nose from a Roman to a pug. 【視訳】 しかし二十年は十分に長い年月ではない。人の鼻を鷲鼻から獅子鼻に変える程に。【語注】①not long enough to- : 慣用的連語「-するのに十分な長さではない」。②change a man's nose from a Roman to a pug : 「人の鼻を鷲鼻から獅子鼻に変える」。a Roman = a Roman nose「鼻梁の高い鼻」、即ち「鷲鼻」。a pug = a pug nose「ブルドッグに似た平べったく低い鼻」、即ち「獅子鼻」。

\*You've been under arrest for ten minutes. Silky Bob. 【視訳】 君は逮捕されているんだよ、10分前から。『物柔らかな』ボブ。【語注】①You've been under arrest for ten minutes : 現在完了形(状態の継続)「君は10分前に逮捕されて今は拘束中である」。②Silky Bob : 引用符は強調。形容詞 Silky は「声や態度が絹の様に柔らかい」と言う意味。ボブの態度が物柔らかかであったのは、自分が今逮捕されている身分である事を知らなかった為であろう。従って、この状況下に於ける『Silky』という言葉には一種の皮肉の感じが秘められている。

\*Chicago thinks you may have dropped over our way and wires us she wants to have a chat with you. 【視訳】 シカゴ警察は次の様に考えているんだ。即ち君が立ち寄っているかも知れない、こちらの方面に、と言う事である。そして電報で知らせて来ているのだが、シカゴ警察は話がしたいと言っている、君と。【語注】①Chicago : 「シカゴ警察」。この表現は比喻の一種であり、文脈から判断してChicagoは「シカゴ警察」と言う意味である事が理解される。【類例】Tokyo(日本、日本政府)、Washington(アメリカ、米国政府)。②may have dropped over our way : 「助動詞 may+原形完了形」は推量の過去形「〜したかも知れない」。③wires us she wants to : 「電報でシカゴ警察は〜したいと言っている」。she はシカゴ警察。

\*Going quietly, are you? 【視訳】 静かに行くだろうね、君? 【語注】①全文 = Are you going quietly?

\*unfolded the little piece of paper handed him. 【視訳】 小さな紙切れを開いた。それは彼に渡されものであった。【語注】①handed him : 過去分詞 handed は修飾後置形式の形容詞的用法、後方から前出語 paper を修飾。

\*it trembled a little by the time he had finished. 【視訳】 彼の手は震えていた、微かに。その時迄には彼はその手紙を読み終えていた。【語注】①by the time : 前置詞句で時を表わす副詞節を誘導「〜の時までに」。②he had finished : 過去完了形は過去の動作 trembled よりも前に行われた動作を表わす。

\*so I went around and got a plain clothes man to do the job. 【視訳】 それで僕は一回りして私服の警察官に頼んでその仕事をしてもらったんだ。【語注】①got a plain clothes man to do the job : got~to-は連語的構文「〜に〜して貰った」。the job とは友人ボブを逮捕する事である。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列举する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を ( ) 内の算用数字で表わす。

op-po-site(1), di-rect-ly(2), doubt-ful-ly(1), ex-ist-ence(2), mod-er-ate-ly(1), e-go-tism(1), his-to-ry(1), be-gin-ning(2), ca-reer(2), sub-merge(2), e-lec-tric(2), si-mul-ta-ne-ous-ly(3), sud-den-ly(1), qui-et-ly(1), pat-rol-man(2), ci-gar(2)

## 単元17. 雪女 *Kaidan* by Lafcadio Hearn

【著者略歴】 Lafcadio Hearn (1850-1904) :ギリシア生まれの米国文学者、小説家、随筆家、日本研究家、1896年日本帰化、日本名は小泉八雲、代表作品『骨董(1902)』、『怪談 (1904)』。

### 1. 【視訳】 と 【語注】

NB (Nota Bene = L. Note Well) : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\*O-yuki bore Minokichi ten children, boys and girls, handsome children all of them, and very fair of skin. 【視訳】 お雪は巳之吉との間に10人の子供を産んだ。男の子と女の子、美しい子供達であった、みんなが。そして色白な肌だった。【語注】 ① bore Minokichi 10 children : 「巳之吉との間に10人の子供を産んだ」。動詞 bore は bear の過去形で二重目的を伴う「～との間に子供を産んだ」。② boys and girls, handsome children all of them, and very fair of skin : 並列記述挿入句で 10 children の補足説明句である。

\*The country folk thought O-Yuki a wonderful person, by nature different from themselves. 【視訳】 その村の人達の思いは、お雪は不思議な人であり、別人である、彼等とは違って、と言う事であった。【語注】 ① The country folk thought O-Yuki a wonderful person : 動詞 thought は不完全他動詞で第五文型 (SVOC) を形成する「～を...であると思った」。② by nature different from themselves : 「生まれつき彼等とは違う」。並列記述挿入句、動詞 thought の目的格補語。by nature は熟語「生まれつき、生粋の」。different from は連語「～とは違っている」。

\*Most of the peasant-women age early; but O-Yuki even after having become the mother of ten children, looked as young and fresh as on the day when she had first come to the village. 【視訳】 大部分の百姓の女達は年を取るのが早い、お雪はその後母親になって10人の子供を産んだが、容貌は若々しく新鮮であり、あの日、即ち彼女が初めてやって来た日であるが、その時と同じであった。【語注】 ① age early : 「年を取るのが早い」。age は動詞「年を取る」。② even after having become the mother of ten children : 「10人の子供の母親になった後でさえも」。having become は動名詞の完了形、前置詞 after の目的語「～になって仕舞った後でさえも」。③ looked as young and fresh as : 「～と同じ様に若くて新鮮に見えた」。as~as... は慣用的な同等比較表現「...と同じ様に～である」。④ on the day when she had first come to the village : 「彼女が初めて村にやって来たあの日に」。関係副詞 when は修飾後置形式の形容詞節を誘導。先行詞は前出語 the day。

\*To see you sewing there, with the light on your face, makes me think of a strange thing that happened when I was a lad of eighteen. 【視訳】 お前がそこで縫物をしている姿を見ると、灯が顔に当たっていて、思い出すが、不思議な出来事が在ったんだよ。当時私は若造で18歳だった。【語注】 ① To see you sewing there : 不定詞の名詞的用法 (無生物主語) 「お前がそこで縫物をしている姿を見る事」。述語動詞は後出語 makes である。不定詞 to see は短期記憶保留にして、先に you sewing there を把握する。② with the light on your face : 前置詞 with の付帯状況用法「顔に灯を当てた状態で」。③ makes me think of : 「私に～を思い出させる」。主語は前出不定詞 To see である。

\*and about the White Woman that had stooped above him, smiling and whispering. 【視訳】 それから更に白い女の事に就いて話した。その女は覆い被さって彼を見詰め、微笑み乍ら囁いた事を。【語注】 ① the White Woman that had stooped above him : 「彼に覆い被さっていたあの白い女」。that は関係代名詞、先行詞は前出語句の the White Woman である。過去完了形 had stooped は複数の行動の時間差を表わす表現、即ち「時制の一致 (Sequence of Time)」と言う文法は日本語は時制に関しては主観的であり、過去の事に就いて陳述し乍ら「ル形の動詞」を多用して、共感性や臨場感を醸成する。【類例】 私の母から受取った手紙の中に、父の病気の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、出来るなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった (夏目漱石:「こころ」)。② A letter had come from my mother, saying that my father's illness had taken a turn for the worse, and that though there was no immediate danger, I should come home if possible. (E. McClellan: *Kokoro*)。③ smiling and whispering : 分詞構文 (付帯状況) 「その時、彼女は微笑み囁いていた」。

\*Asleep or awake, that was the only time that I saw a being as beautiful as you. 【視訳】 寝ても覚めても、その時だけだった、私が見たのは、一つの生き物を。然もとても美しかった、お前の様に。【語注】 ① Asleep or awake : 慣用的な譲歩表現「例え寝ていたとしても、又は起きていたとしても」。② that was the only time that : 「それが～した唯一の時だった」。最初の that は指示代名詞、後の that は関係副詞で先行詞は the only time。③ I saw a being as beautiful as you : 「私はお前と同じ様に美しい生き物を見た」。a being は「或る一つの生き物」。尚人間は a human being。

\*Indeed, I have never been sure whether it was a dream that I saw, or the Woman of the Snow. 【視訳】 本当に、私は今も全く分からない。それが夢だったのか、私が見たものは、それとも雪女だったのか。【語注】 ① I have never been sure whether ~, or... : 「～だったのか、それとも...だったのか今も全く分からない」。現在完了形 have never been sure は現在迄の継続状態「今迄ずっと確信が持てない状態であった」。whether~or は間接疑問の名詞節誘導、慣用的な相関接続詞である。

\*O-Yuki flung down her sewing, and rose, and bowed above Minokichi where he sat, and shrieked into his face. 【視訳】 お雪は投げ捨てた、彼女の縫物を。そして立ち上がり、身を屈めて巳之吉に覆い被さった。巳之吉が座っていたその場所で。そして金切り声を浴びせた、彼の顔に。【語注】 ① sewing : 「彼女が縫っていた物」。sewing は「縫う」と言う動作の対象物を表

わす動名詞「縫物」である。【類例】 his washing (彼の洗濯物)、 her ironing (アイロンをかけている衣類)、 the author's writings (その作家の著書) 等。②where he sat: 「彼が座っていたその場所で」。関係副詞whereは先行詞の意味合いも兼ねている「～である所の場所で」。③shrieked into: 「金切り声を～に浴びせた」。

\*Yuki it was! And I told you then that I would kill you if you ever said one word about it!・・・【視訳】雪だったんだよそれは!そして私は言いましたね、その時、あなたに。私はあなたを殺すと。もしあなたが一言でも口にして、その事に就いて他言したら・・・【語注】①Yuki it was!: 強調の為の文倒置 (= It was Yuki!)。②I would kill you if you ever said one word about it!: 仮定法過去形であるが、仮定法は文法的には主節の動詞の時制 (I told you) とは無関係であるとされるので、「時制の一致の法則 (Time of Sequence)」は当て嵌まらない。副詞 ever は強調「もし万一～をするならば」。

\*But for those children asleep there, I would kill you this moment!【視訳】もしあの子供達が居なかったら、今ここで眠っているが、私はお前を殺す、この瞬間に!【語注】①But for: 仮定法の条件句を誘導する慣用的前置詞句「もし～が無かったら」。= Without/If it were not for。②I would kill you: 仮定法過去形の帰結節「私はお前を殺す」。③this moment: 「この瞬間に、今直ちに」。

\*for if ever they have reason to complain of you, I will treat you as you deserved!【視訳】と言うのは、もし万一子供達に最もな理由が在って、お前に不満が在るならば、私はお前を扱う、それ相応に。【語注】①if ever: 「もし万一～ならば」。ever は強調の副詞「万一起」。②have reason to: 慣用的連語「～する最もな理由が在る」。③as you deserved: 「お前に相応しい様に、それ相応に」。

\*Then she melted into a bright white mist that spired to the roof beams, and shuddered away through the smoke-hole・・・ Never again was she seen.【視訳】それからお雪は溶けて輝く白い霧に成り、螺旋状に上昇して梁の方へもやって上昇して、震え乍ら排煙穴を通して消えて行った。そして決して再び見られる事は無かった。【語注】①melted into: 「溶けて～に成った」。前置詞 into は「状態や動作の移行や変動」を表わす。②shuddered away through: 「震え乍ら～を通過して姿を消した」。Never again was she seen.: 文倒置 (= She was never seen again)。副詞 Never again が文頭に出たので、それに引かれてBe動詞が文頭に出た。「文倒置 (Inversion)」はBe動詞と助動詞が在る場合はそれ等が引かれて文頭に出るが、一般動詞の場合は、現在形は do 又は does が、過去形は did が文頭に出て、一般動詞は原形に戻る。【例文】 One or two men of letters, beginning with a poet, than whom only Shakespeare had a more splendid genius, (W. S. Maugham: *Of Human Bondage*) (その学校の卒業生には) 1人、2人の文人が含まれており、詩人も居たが、彼等より優れていたのは、文豪シェイクスピアだけであった (シェイクスピアには及ばなかったが優れた才能を持っていた)。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列举する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を ( ) 内の算用数字で表わす。

af-fec-tion(2), hand-some(1), won-der-ful(1), res-pond(2), ter-ri-ble(1), fer-ry-man(1), whis-per-ing(1), mo-ment(1), com-plain(2), shud-der(1)

## 単元18. 孤独 *Loneliness* by Sherwood Anderson

【著者略歴】 Sherwood Anderson (1876-1941) : 米国作家。1913年シカゴでドライバーの知遇を得て執筆活動開始。1919年短編集『Winesburg, Ohio』を発表。代表作品『The Triumph of the Egg (1921)』、『Dark Laughter (1925)』。

### 1. 【視訳】と【語注】

NB (Nota Bene = L. Note Well) : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\*It is important to get that fixed in your mind. 【視訳】重要なのはそれを心に留めておく事である。【語注】①that : 前文内容、即ち若きロビンソンが住んでいる部屋は狭くて細長い廊下の様な部屋であったと言う事である。②to get~fixed in your mind : 慣用的な連語「~を心に留める」。

\*The story of Enoch is in fact the story of a room almost more than it is the story of a man. 【視訳】イノックの物語は、事実上、一つの部屋の物語であり、殆ど人間の物語であると言う以上のものである。【語注】①in fact : 「実際は、事実上、要するに」。【類似表現】as a matter of fact, in point of fact, to tell the truth, as things stand, practically, actually等。②almost more than it is the story of a man : 修飾後置形式の形容詞節、前出句 the story of a room を後方から修飾「それは殆ど人間の物語であると言う以上のものである」。

\*And so into the room in the evening came young Enoch's friends. 【視訳】その様な状況下で、その部屋の中へ、夕方、やって来たのが、若いイノックの友人達であった。【語注】①And so : 「その様な状況下で」。前文で言及したロビンソンの部屋やイノックの物語等である。②into the room in the evening came~ : 文倒置。

\*There was nothing particularly striking about them except that they were artists of the kind that talk. 【視訳】何も特に目立つものは無かった、彼等には次の事以外は。即ち彼等は芸術家達であり、共通点はお喋りをすると言う事位であった。【語注】①except : 接続詞、that節を従えて「~と言う事を除いて」。②artists of the kind that talk : 「お喋りをすると言う類の芸術家達」。that は関係代名詞。

\*Throughout all of the known history of the world they have gathered in rooms and talked. 【視訳】全世界有史を通して、ずっと芸術家達は部屋に集まってお喋りをして来たのである。【語注】①Throughout all of the known history of the world : 前置詞Throughoutは短期記憶保留、先にall以下を把握。②have gathered in rooms and talked : 現在完了形(継続動作)、ここでは継続状態の意味合いである。

\*They talk of art and are passionately, almost feverishly, in earnest about it. 【視訳】彼等の話は芸術に就いてであり、情熱的に、殆ど熱狂的に、熱心に語るのであった。【語注】①They talk of~and are... : 動詞が現在形であるが実際の意味合いは過去形である。所謂、過去の事実を現在形で表現する事に依って臨場感を醸し出す表現技法である。②in earnest about it : 「芸術に就いて語り合う事に熱心である」。代名詞itは芸術に就いてお喋りをする事。

\*They think it matters much more than it does. 【視訳】彼等の考えは次の通りであった。即ちそれは(その様に集まって芸術に就いて情熱的にお喋りをする事) 遥かに重要であると言う事であった、実際よりも。【語注】①They think : 「彼等は~であると考えている」。動詞 think の直後に名詞節誘導の接続詞 that が省略。②it matters much more than it does : 代名詞itは芸術に就いてお喋りをする事。代動詞doesはmattersを代動。

\*How his big blue childlike eyes stared about! 【視訳】何んと彼の大きな青い目が周りをじっと見廻していた事か! 【語注】①全文 : 感嘆文。Howを使った感嘆文の基本形は「How+形容詞又は副詞+主語+動詞!」である。従ってこの感嘆文のHowの直後に副詞「fixedly (じっと)」等を補って解釈する。②stared about : 慣用的な連語「周りを見廻す」。

\*On the walls were pictures he had made, crude things, half finished. 【視訳】あちこちの壁に絵が掛けられてあった。それ等は彼が描いたものだが、粗雑で未完成だった。【語注】①On the walls were pictures : 文倒置 (= Pictures were on the walls)。②crude things, half finished : 並列記述挿入句、前出語 pictures の補足説明「それ等は粗雑で未完成だった」。

\*Leaning back in their chairs, they talked and talked with their heads rocking from side to side. 【視訳】深々と椅子に座り込んで、彼等は喋り続けた。頭を左右に揺すぶり乍ら。【語注】①Leaning back in their chairs : 現在分詞の分詞構文(付帯状況)「椅子に深々と座り込んで」。②talked and talked : 同じ動詞の反復は同じ動作の繰り返しを意味する「喋り続けた」。③with their heads rocking from side to side : withの付帯状況用法(状況説明)「その時彼等は頭を左右に揺す振っていた」。

\*Words were said about line and values and composition, lots of words, such as are always being said. 【視訳】言葉が交わされて、線や明暗の度合いや構図に就いて語られた。実に多くの言葉であったが、それ等は常に言われている言葉であった。

【語注】①values : 美術用語「明暗の度合い」。②lots of words, such as are always being said : 並列記述挿入句。such as are always being saidは前出句lots of wordsの補足的付加説明。such = such words「その様な言葉」、as は関係代名詞。

\*When he tried he sputtered and stammered and his voice sounded strange and squeaky to him. That made him stop talking. 【視訳】彼は話そうとしたが、口から唾が飛び出て口籠り、声の響きが奇妙に成り、軋んで聞こえた。それで彼は話すのを止めた。【語注】①That : 指示代名詞(無生物主語)、前出全文内容を示す「その事が(彼に~させた)」。②made him stop talking : 動詞madeは不完全他動詞(使役動詞)、目的格補語(ここでは原形動詞stop)を従えて第5文型(SVOC)を構成。\*He knew what he wanted to say, but he knew also that he could never by any possibility say it. 【視訳】彼は分かって

いた、何を自分は喋りたいのかと言う事を。然し同時に次の事も分かっていた。即ち彼は何んとしても喋る事が出来ないと言う事を。【語注】①what he wanted to say : 「何を彼は喋りたいのかと言う事」。what は疑問詞、say の目的語「何を」。

② by any possibility : 慣用的副詞句 (否定文の中で) 「何んとしても、とても (—する事が出来ない)」。

\*The picture you see doesn't consist of the things you see and say words about. 【視訳】 その絵、即ち君達が今見ているその絵の構成は次の様な物ではない。即ち君達が今見て云々している物で構成されていないと言う事である。【語注】①The picture you see : you seeは接触節、関係代名詞 which が直前に省略「君達が見ている絵」。②consists of : 連語「〜で構成されている」。③things you see and say words about : you see 以下は接触節、直前に関係代名詞 which が省略。say words about は連語「〜に就いて色々と言物言う」。

\*Look at this one over here, by the door here, where the light from the window falls on it. 【視訳】 見てくれこの絵を、こちらのを。ドアの傍に在るが、そこでは光が窓から差し込んで当たっている。【語注】①this one over here : oneは不定代名詞で pictureを指す。over hereは慣用的な連語「こちらに」。少し離れた場所は over there「あちらに」。②where the light from the window falls on it : 「そこでは窓から差し込む光が絵に当たっている」。関係副詞 where の先行詞は the door here。

\*The dark spot by the road that you might not notice at all is, you see, the beginning of everything. : 【視訳】 この暗い部分、道路の傍のであるが、それは君達は気付かないかも知れない、完全に、でも分かるだろう、それが始まりなのだ、全ての物の。【語注】①you might not notice at all : 「君達は全く気付かないかも知れない」。助動詞 might は假定法 (希薄な可能性の推量) 「ひょっとして〜かも知れない」。②you see : 発話の流れや調子を整える慣用的な口語表現「ねえ、そらね、分かるでしょう」。【類例】 well (まあまあ)、let me say (そうですね)、you know (ご承知の通り) 等。

\*There is a lump of elders there such as used to grow beside the road before our house back in Winesburg, Ohio, and in among the elders there is something hidden. 【視訳】 ニワトコの茂みがそこに在る。昔生茂っていた様なものだが、道路の縁に、家の前に、故郷ワインズバーグでの話である。オハイオ州の。そしてそのニワトコの中に何か隠されている。【語注】①such as used to grow : 「昔生茂っていた様なもの」。前出語句 a lump of elders の修飾語後置形式の形容詞句。

as は関係代名詞で先行詞はsuch (= such elders)。②back in Winesburg, Ohio : 「故郷、オハイオ州ワインズバーグに於いて」。③in among the elders : 「そのニワトコの中に」。in among は二重前置詞句「〜の間の中に」。【類似表現】 from behind (〜の後ろから)、from under (〜のしたから)、in between (〜の間に)、except for (〜を除いて)。

\*It is a woman, that's what it is. She has been thrown from a horse and the horse has run away out of sight. 【視訳】 それは一人の女性だ。正に女性が隠されているんだ。彼女は投げ飛ばされたのだ、馬の背から。そしてその馬は逃げて仕舞って見えない。【語注】①that's what it is : it is の直後に過去分詞hiddenが省略。②has been thrown from a horse : 「落馬して仕舞った」。③has run away out of sight : 「逃げて仕舞って見えない」。out of sight は慣用句「見えない」。

\*Do you not see how the old man who drives a cart looks anxiously about? 【視訳】 君達には分からないのか、如何にその老人が、荷車の御者であるが、心配そうに見回しているかが。【語注】①how the old man~looks anxiously about : 「〜しているその老人が心配そうに見回している様子」。②looks anxiously about : 「心配げに見回している」。

\*Don't you see how it is? The beauty comes out from her and spread over everything. It is in the sky back there and all around everywhere. 【視訳】 君達は分からないのか、それが如何なる様子であるかが。美しさがほとばしり出ている、彼女から、そして拡散し全ての物の上に広がっている。空の向こうにも、全て至る所に。【語注】①how it is : 「それが如何なる様子であるか」。疑問詞 how は名詞節誘導。②in the sky back there : 「空の向こうに」。

\*He was afraid the things he felt were not getting expressed in the pictures he painted. 【視訳】 彼が心配したのは次の様な事が表現されていないのではないのかと言う事であった。即ち色々な事柄、彼が感じた事柄であるが、その様な事柄の否表現化である。それ等の絵の中にあるが、彼が描いた絵である。【語注】①He was afraid : 「〜が心配であった」。直後に名詞節誘導の接続詞thatが省略。②the things he felt : he felt は接触形容詞、直前に関係代名詞 which が省略。③were not getting expressed : 「表現されていない」。動詞 getの受動態進行形 Be動詞 were は「時制の一致の法則 (Sequence of Time)」に依り述語動詞句 was afraid に呼応。④in the pictures he painted : 「彼が描いた絵の中に」。he painted は接触形容詞節。

\*In a half indignant mood he stopped inviting people into his room and presently got into the habit of locking the door. 【視訳】 半ば憤慨し乍ら、彼は中止した。人々を招待して部屋に入れる事を。そしてやがて習慣化した事はドアに鍵を掛ける事であった。【語注】①In a half indignant mood : 副詞句「半ば憤慨した心理状態で」。前置詞inは「〜の状態で」と言う意味。②got into the habit of -ing : 慣用的連語「—する習慣に成った」。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列挙する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を ( ) 内の算用数字で表わす。

par-tic-u-lar-ly(2), through-out(2), pas-sion-ate-ly(1), fe-ver-ish-ly(1), cig-a-ette(1), com-po-si-tion(3), co-her-ent-ly(2), stam-mer(1), pos-si-bil-i-ty(3), dis-cus-sion(2), ex-plain(2), con-sist(2), in-tend(2), no-tice(1), anx-i-ous-ly(1), suffer-ing(1), ex-press(2), in-dig-nant(2)

## 単元21. 常識と科学の違い *The Aim of Science by Arthur Thomson*

【著者略歴】 Sir Arthur John Thomson (1861-1933) : 英国博物学者、元アバデーン大学教授、科学と宗教を関連付けて生物化学の進歩に就いて人々を啓蒙。代表著書『Evolution (1911)』。

### 1. 【視訳】と【語注】

NB (Nota Bene = L. Note Well) : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\*Thus one of the most marked characteristics of science is its critical quality, which is just what common-sense lacks. 【視訳】 その様な訳で、最も顕著な特質、詰まり科学のそれであるが、その中の一つが批判的な性質であり、それが正に常識には無いものである。【語注】 ① One of the most marked characteristics of science : 前置詞 of が誘導する修飾語後置形式の形容詞句は既に単元2で言及した通りである。②, which is just what common-sense lacks : 「それが正に常識には無いものである」。関係代名詞 which の先行詞は直前の語句 its critical quality。

\*By common-sense is usually meant either the consensus of public opinion, of unsystematic every-day thinking, the untrustworthiness of which is notorious, or the verdict of uncritical sensory experience, which has so often proved fallacious.

【視訳】 常識に依って、通常、意味される事は、先ず世論の総体である。然しそれは非体系的で日常的な思考の総体であり、その非信頼性は周知の通りである。もう一つは判断であるが、無批判的で感覚的な経験上のものである。そしてそれは余りにも頻繁に実証されて来ているが、不合理なものである。【語注】 ① By common-sense is usually meant : 文倒置、正常語順は Either ~, or ... is usually meant by common-sense である。② either ~ or ... : 慣用的な相関接続詞、名詞句や名詞節を誘導「~か或いは...かと言う事」。③ the consensus of public opinion : the consensus は短期記憶保留、先に public opinion を把握。この様な of-phras e に就いては既に言及済みである。④ of unsystematic every-day thinking : 前出語 the consensus に繋がる。⑤ the untrustworthiness of which is notorious : 「その信頼性の無さは悪名高い」。関係代名詞 which の先行詞は unsystematic every-day thinking である。⑥, which has so often proved fallacious : 関係代名詞 which の非制限用法、先行詞は前出句 the verdict of uncritical sensory experience である。

\*it was "common-sense" that refused to accept Harvey's demonstration of the circulation of the blood. 【視訳】 それは『常識』であった。拒否して受け入れ様としなかったのは、ハーヴィの証明をである。それは血液循環に就いての証明であった。【語注】 ① It was ~ that ... : 慣用的な強調構文。② Harvey's demonstration of the circulation of the blood : 「ハーヴィの血液循環に就いての証明」。Harvey (William Harvey, 1578-1657) は 英国の解剖学者、血液循環説を唱導。

\*We have already pointed out that Science is independent of any particular order of facts. 【視訳】 我々は既に次の事を指摘した。即ち科学は独立しており、如何なる固有の秩序とも、即ち諸事実の秩序とも無関係であると言う事をである。【語注】 ① is independent of : 慣用的連語「~とは無関係である」。② any particular order of facts : 「物事の如何なる固有の秩序」。order は「物事の秩序、道理、理法」であり、物事の規則的な本質である。

\*It takes the knowable universe for its subject; it deals with psychical as well as physical processes, with Man as much as with Nature; it has to do with everything to which its methods can be applied. 【視訳】 科学は理解し得る世界を取り上げて研究対象にする。従って科学が取り扱うのは精神的な過程をもであり、物理的な過程は勿論である。即ち人間も同じ程度に扱うのである、自然は勿論の事であるが。その様な訳で科学が扱わねばならないのは全ての事柄であり、それ等に対して科学の方法が適応され得るものなのである。【語注】 ① It takes ~ for ... : 「~を...として取り上げる」。It は「科学」。② it deals with psychical as well as physical processes : 「科学は物理的な過程と同じ様に精神的な過程をも扱う」。慣用的な前置句 as well as は not only ~ but also ... と同意語であるが語順が違う。即ち A as well as B = not only B but also A である。③ with Man as much as with Nature : = it deals with Man as much as with Nature 「科学は自然を扱う度合いと同じ程度に人間をも扱う」。④ it has to do with everything to which its methods can be applied : 「科学はその方法が適応され得る全ての事柄を扱わねばならない」。to which の前置詞 to は後出動詞句 can be applied との関係で付加。

\*What makes a study scientific is not, of course, the nature of the things with which it is concerned, but the method by which it deals with these things. 【視訳】 1つの研究を科学的にするものは、勿論、次の様なものではない。即ち物事の性質ではないと言う事である。この物事とは科学が関係する物事である。さて、そうではなくて、方法である。その方法を使って科学がそれ等の事柄を扱うのである。【語注】 ① 全文 not ~, but ... 構文 : 慣用的な相関連語「~ではなくて、...である」。② What makes a study scientific : 「1つの研究を科学的にするものは」。What は短期記憶保留にして、makes 以下を先に把握。makes は不完全他動詞で第5文型 (SVOC) を構成「~を...の状態にする」。③ the nature of the things with which it is concerned : 「科学が関係するそれ等の物事の性質」。with which の前置詞 with は後出動詞句 is concerned との関係で付加 (= which it is concerned with)。④ the method by which it deals with these things : 「科学がこれ等の物事を扱う方法」。by which の前置詞 by は後出動詞句 deal with との関連で付加 (= which it deals with these things by)。

\*The subject-matter of Science includes all clearly defined facts of experience which are communicable and verifiable. 【視訳】 科学の主題には次の様なものが包含される。即ち全て明確に定義付けられる事実であり、経験上のものである。そしてそれ等は伝達可能であり実証可能である。【語注】 ① all clearly defined facts of experience : 「全てははっきりと定義付けられる経験



上の事実」。**②which are communicable and verifiable** : 関係代名詞whichの先行詞は前出語句 all clearly defined facts of experienceである。接尾語「-able」は動詞や名詞に付加して可能性を表わす。

**\*Before Science really begins, a preliminary sifting is often necessary to distinguish supposed facts seen by the untutored eye from clearly defined facts.** 【視訳】 科学が実際に始まる前に、予備的な振り分けがしばしば必要であるが、その目的は次の2つの事柄を区別する事である。即ち1つは想定的な事実で、教育されていない目に依って見られたものであり、2つ目は明確に定義付けられている事実である。【語注】 **①A preliminary sifting is often necessary to distinguish~from...** : 「~と...を区別する為に予備的な振り分けがしばしば必要である」。不定詞 to distinguish は副詞的用法(目的)、視訳では直前で区切って「その目的は~する事である」とする。**②supposed facts seen by the untutored eye** : 「教育されていない目で見られた想定上の事実」。過去分詞seenは修飾語後置形式の形容詞的方法。

**\*The facts that Science takes to do with are "real" and "what is real means something which we do not make but find."** 【視訳】 次の様な事実、即ち科学が取り上げて扱う事実は『実在的』である。そして『この実在的とは次の様な物を意味している。即ち我々が作り上げるものではなくて、見出すものであると言う事である』。【語注】 **①Science takes to do with** : 「科学が扱う為に取り上げる」。視訳では不定詞to do withを結果を表わす副詞的用法として「~して、そして~を扱う」と解釈する。**②something which we do not make but find** : 斜字体の動詞 make と find は強調表現。

**\*As Thomas Hobbes of Malmesbury said in his great Leviathan (1651): "Natural history is the history of such facts or effects of nature as have no dependence on man's will."** 【視訳】 トマス・ホブズは、マームズベリイの人であるが、著名な「リヴァイアサン(1651)」の中で次の様に述べている通りである。即ち「博物学は次の様な歴史である。即ち自然の事実又は作用の歴史であり、次の物とは無関係である。即ち人間の意志とはである」と。【語注】 **①As Thomas Hobbes of Malmesbury said** : 「マームズベリイのトマス・ホブズが次の様に述べている」。接続詞 as は様態を表わす「~である様に、~の通りに」。Thomas Hobbesは英国の政治哲学者(1588-1679)、唯物論の先駆者。Malmesbury はイングランド中央部に位置するコッツウォール地方の小さな町。**②Leviathan** : 「リヴァイアサン」。ホブズの代表的な政治哲学書(1651)。題名は旧約聖書(ヨブ記)に登場する海の怪物レヴィアタンの名であると言われている。**③such facts or effects of nature as** : 「~の様なその様な自然の事実或いは作用」。such~as は慣用的な連語。such は形容詞、as は関係代名詞。**④have no dependence on man's will** : 「人間の意志に対する依存性は全く持たない」、即ち「人間の意志とは無関係である」と言う意味である。

**\*Only one self-denying ordinance has Science imposed on itself in regard to its subject-matter.** 【視訳】 唯一の自己抑制規定が科学に課されているが、それは主題に関してである。【語注】 **①has Science imposed on itself** : 「~が科学自体に課されている」。has~imposed は過去分詞に強勢「~にされる」。**②in regard to** : 慣用的前置詞句「~に関して」。

**\*The ordinance is that Science shall consist only of the communicable and verifiable.** 【視訳】 その規定は次の様な内容である。即ち科学の構成は唯一伝達可能で立証可能なものだけに依らねばならないと言う事である。【語注】 **①The ordinance** : 前出句 Only one self-denying ordinance 「唯一自己抑制規定」。**②shall** : 法律用語助動詞(命令、禁止)「~すべし」。

**\*However real certain personal experiences may be to us, we are restrained by boundaries of our own erection from calling these experiences scientific territory.** 【視訳】 如何に実在的であるとしても、或る個人的な経験が、私達にとってであるが、私達が規制されているのは次の事に依ってである。即ち私達自身の枠組みの境界に依ってである。従ってそれ等の経験が科学的な領域であるとは言えないのである。【語注】 **①we are restrained by~from-ing** : 受動態連語「私達は~に依って規制されているので~する事は出来ない」。**②calling these experiences scientific territory** : 「これ等の経験を科学的な領域であると呼ぶ事」。動名詞 calling は不完全他動詞で第5文型(SVOC)を形成「~を...と呼ぶ」。

**\*They may be, but they are not until it is shown that similar personal experiences will be enjoyed by all who place themselves in the appropriate conditions.** 【視訳】 その様な経験が科学的な領域であるかも知れないが、その様には言えないのである、但し次の事が実現される迄はである。即ち明確に示される迄はであるが、同じ様な個人的な経験が全ての人々に依って享受される迄はである。全ての人々とは、自らを適切な条件下に置いている全ての人々の事である。【語注】 **①they are not until** : 「それ等は~して初めて科学的な領域であると言える」。not~until...は慣用的な連語構文「...して初めて~する」。**②will be enjoyed by** : 「~に依って享受される」。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。下、各単元に於ける単語の音節分析を列挙する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を( )内の算用数字で表わす。

con-trast(1), char-ac-ter-is-tic(4), crit-i-cal(1), qual-i-ty(1), con-sen-sus(2), un-sys-tem-at-ic(4), un-trust-wor-thi-ness(3), no-to-ri-ous(2), ver-dict(1), un-crit-i-cal(1), sen-so-ry(1), ex-pe-ri-ence(2), fal-la-cious(2), ac-cept(2), dem-on-stration(3), cir-cu-la-tion(3), in-de-pend-ent(3), par-tic-u-lar(2), u-ni-verse(1), psy-chi-cal(1), phys-i-cal(1), proc-ess(1), ap-ply(2), sci-en-tific(3), con-cern(2), sky-lark(1), nec-es-sar-i-ly(1), zo-o-log-i-cal(3), com-mu-ni-ca-ble(2), ver-i-fi-a-ble(1), pre-lim-i-nar-y(2), nec-es-sar-y(1), dis-tin-gish(2), un-tutored(2), de-pend-ence(2), or-di-nance(1), im-pose(2), cer-tain(1), per-son-al(1), res-train(2), bound-a-ry(1), sci-en-tific(3), ter-ri-to-ry(1), sim-i-lar(1), ap-pro-pri-ate(2)

## 単元24. 科学概論

### “Discovery or the Spirit and Service of Science” by Sir Richard Gregory

【著者略歴】 Sir Richard Gregory (1864-1952) : 英国天文学者、科学振興者、元ロンドン大学クインズ校天文学教授、元中等学校科学教育委員会委員長。科学雑誌「Nature」の編集に貢献。多くのテキスト出版(天文学、科学、衛生学、物理、その他科学関係の教科書)。1919年ナイト称号授与。1933年英国学士院会員。

#### 1. 【視訳】と【語注】

NB (Nota Bene = L. Note Well) : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\*It has been truly said that the tendency of the human mind is to exaggerate the possibility of the unknown. 【視訳】 次の事は、誠に適切であるのだが、今日迄ずっと言われて来た。即ち人間の精神的な傾向は誇張する事であると言うのである。但しそれは見知らぬ物の現実化の可能性に就いてである。【語注】①It has been truly said that : 受動態の現在完了形(継続)「～と言う事がずっと言われて来た」。副詞 truly は動詞 said を評価的な意味合いで修飾。【類似表現】 He was punished and rightly so. (彼は罰を受けたが、それも当然である)。②is to exaggerate : 「～を誇張する事である」。不定詞は名詞的用法。③the possibility of the unknown : 「未知なる物の現実化の可能性」。the unknown は定冠詞の用法「the十分詞(形容詞)」の語形で抽象概念(単数扱い)を表わす。同じ語形で総体的な名詞(複数扱い)の意味にも成る。【類似表現】 the true, the good, and the beautiful (真、善、美)、the supernatural (超自然的な物)、the young and the old (若者と老人)、the rich and the poor (金持ちと貧乏人)。

\*Wherever there is ignorance, Nature is dreaded as much as a child dreads darkness. 【視訳】 どのような場合でも無知が在れば自然は恐れられるが、その恐怖度は同程度に子供が暗闇を恐れるのと同じである。【語注】①Wherever : 接続詞「～の場合は何処ででも」。②as much as a child dreads darkness : 「子供が暗闇を恐れるのと同じ程度に」。最初の as は指示副詞、後の as は接続詞である。従って「～の様にその程度に・・・である」と言う原義である。

\*From the time that Newton showed that comets travel round the sun in definite paths under the control of gravitational attraction, the feeling of awe and anxiety formerly produced by such celestial visitors has been diminishing. 【視訳】 次の様な時代から、即ちニュートンが解明して、彗星の運航は太陽の周りを有限の軌道に沿って、引力の支配を受け乍ら動いているものだと示した時代以来、畏敬と不安の念、以前はその起因がそうした天体の訪問者であったのだが、今では次第に消滅しつつある。【語注】①From the time that~ : 「～である時代から」。that は関係副詞(= when)、先行詞は the time。②in definite paths : 「有限の軌道に沿って」。前置詞 in は alongと同義。③under the control of gravitational attraction : 「引力の支配を受けて」。前置詞 under は支配、影響、保護等を表わす「～の支配下で、～の影響を受けて」。④formerly produced by : 「～に依って惹き起こされた」。過去分詞の修飾後置形式形容詞的用法。後方から前出句 the feeling of awe and anxiety を修飾。⑤has been diminishing : 「ずっと次第に消滅している」。現在完了進行形(継続)。

\*They are now looked upon as interesting spectacles instead of being regarded as heralds of disaster. 【視訳】 それ等の訪問者達は今は次の様な物として見做されている。即ち興味深い現象としてである。以前の考えの様に災難の前触れとしてではないのである。【語注】①are now looked upon as : 慣用的な連語「～として見做されている」。②instead of being regarded as : 「～として見做される代わりに」。instead of は慣用的な前置詞句「～の代わりに」。being regarded as は慣用的な受動態連語「～として見做される事」。Being は動名詞で前置詞句 instead of の目的語。尚、前置詞(句)は常に目的語(名詞)を従える。③heralds of disaster : 「災難の前触れ」。of-phrase は1つの意味塊として把握する。

\*The man who steps over the side of a cliff, consciously or unconsciously, meets the consequences of his action swiftly, whether he be sinner or saint; 【視訳】 次の様な人間、即ち足を踏み出して崖の斜面を踏ん付ける様な人間は、意識的であろうが無かろうが、直面するのはその行動の結果である。然も直ちにである。その人間が罪人であろうが聖人であろうが関係は無い。【語注】①steps over the side of a cliff : 「崖の斜面へ足を踏み出す」。②consciously or unconsciously : 譲歩表現「意識的であろうが無かろうが関係無く」。

\*and the laws of health can no more be broken with impunity than can the law of gravitation. 【視訳】 健康の法則が破られ得ないのは、但し無罪ではの話であるが、次の事と同じである。即ち引力の法則である。【語注】①the laws of health can no more be broken with impunity : 「健康の法則は～と同じ様に罰を受けずに破られる事は在り得ない(破ったら必ず罰を受ける)」。②can no more – than can . . . : 比較級の慣用的否定表現「・・・と同じ様に一する事は出来ない」。③with impunity : 「罰を受けずに」。前置詞 with は「様態」を表わす。【類似表現】 with surprise (驚いて)、with difficulty (苦労して)、with care (注意して)、with courage (勇敢に)、with safety (安全に)、with skill (巧妙に)。

\*Science has shown that a disease is due to a particular cause, preventable or otherwise, though it may not tread closely upon the heels of action. 【視訳】 科学はこれまでに次の事を示して来た。即ち病気の原因が或る特殊な起因に依るものであると言う事である。例えそれが予防出来る病気であろうとなかろうと、然も或る行動の直後に発症すると言う病気ではないかも知れないがである。【語注】①due to : 慣用的な前置詞句「～の理由から、～の為に」。②preventable or otherwise : 並列記述挿入句(譲歩)「予防可能な病気であろうとなかろうと」。③tread closely upon the heels of action : 熟語「或る行動の直後に発症する」。

**\*The recognition that knowledge of the physical universe is only the bud of a flower which can never be seen in its perfection is the salvation of science.** 【視訳】 次の様な認識、即ち物理的世界の知識は単なる花の蕾に過ぎないと言う認識、実は花の蕾は決して見られないのである、開花の状態では、然しその様な認識は科学にとって救いなのである。【語注】

① **knowledge of the physical universe:** 「物理的な世界に就いての知識」。前置詞 of は言及や関係を表わす「～に関して、～の点に就いて」。② **which can never be seen in its perfection:** 「その完成した形、即ち開花した状態で見られる事は決してない」。in its perfection の前置詞 in は状態を表わす「～の状態で、～に成って」。

**\*Nature acknowledges no exclusive claims to truth or right of dictatorship in her name over either this generation or the next.** 【視訳】 自然は次の様な事は決して認めない。即ち排他的な主張、それは真実に対しての主張であるが、或いは又独裁権、詰まりその名の下に支配する今世代や次世代に対する独裁権は認めないと言うのである。【語注】 ① **acknowledges no exclusive claims to truth or right of dictatorship:** 「真理に対する如何なる排他的な主張も、或いは又独裁権も認めない」。目的語の否定形「no+名詞」を従えて否定的な動詞の意味合いを表わす表現、即ち acknowledges no~ は英語の特徴である。② **in her name over:** 「今世代或いは次世代の名の下に~を支配する」。in her name は「その名の下に、それを代表して」。代名詞 her は this generation or the next を指す。前置詞 over は支配関係や優位性を表わす「~を支配する」。③ **either this generation or the next:** 「今世代或いは次世代」。either~or... は慣用的な相関的接続詞「~か或いは...かどちらか一方(両方共に)」。the next = the next generation である。英語には同じ語彙の反復を避ける為に「前向き空所化(Forward Gapping)」と言う特徴がある。従って the next に続くべき単語 generation が省略されて最後の部分で示されている。日本語は「後向き空所化(Backward Gapping)」言語であり、反復語彙は前の部分では省略されて、最後に一括して示される。【類似表現】すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母も従妹も妙なのです(夏目漱石:「こころ」)。When I looked about me I saw that not only had my uncle become strange, but **my aunt and my cousin also** (E. McLellan: *Kokoro*)。英語では下線部の直後に前出語句 become strange が省略されている。一方、日本語では最後に「妙なのです」と言っている。所謂「後向き空所化」である。

**\*The scientific man has to work for truth so far as her ways can be comprehended by him, but he is never more than a trustee for posterity, and has no authority to define the functions or limit the freedom of those who follow him.** 【視訳】 科学者がせねばならない仕事は真理の追求であるが、それは次の様な条件の下に於いてである。即ち自然の姿が理解される迄と言う条件である。然し科学者は決して次の様な者以上の者ではない。即ち次世代の為の保管人以上の者では決してないと言う事である。更に科学者には次の様な権限は無いのである。即ち定義付けて役割を定めたり、更には限定して自由を束縛する権限であるが、それ等は後に続く後輩達のものである。【語注】 ① **so far as her ways can be comprehended by him:** 「自然の姿が科学者に依って理解される迄は」。so far as は慣用的な接続詞句(= as far as) 「~迄は」。her ways は「自然の姿、状態」。② **is never more than a trustee for posterity:** 「次世代の為の保管人の様な者である」。never more than は「~以上では決してない」、即ち「~と同じである」と言う意味である。③ **has no authority to:** 「~する権限は無い」。目的語が「no+名詞」の表現に就いては既に言及した通りである。④ **authority to define the functions or limit the freedom of those who follow him:** 「科学者に従う人々の役割を規定したり、自由を制限したりする権限」。the functions も the freedom も共に修飾後置形式の形容詞句 of those who follow him に依って修飾されている。

**\*This position should never be taken in science, which invites investigation, welcomes criticism, and rejoices at new truths to supersede or supplement the old.** 【視訳】 この様な姿勢は決して取られるべきではない、特に科学に於いてはである。科学は探究を招き、批判を歓迎する。そしてその喜びは新しい真実に対してである。その様な新しい真実が取って代わり、或いは補足するのは古き物なのである。【語注】 ① **which:** 「そして科学は」。句読点(コンマ)の直後の関係代名詞は非制限的用法であり and it と同義である。先行詞は前出語 science である。② **the old:** 「古い物」。「the+形容詞(分詞)」は普通名詞「~の人(複数扱い)」或いは抽象名詞「~の属性を持った物(単数扱い)」を造語する。【類似表現】 the learned (博学な人々)、the true, the good, and the beautiful (真善美)。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列举する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を( )内の算用数字で表わす。

ten-den-cy(1), ex-ag-ger-ate(2), pos-si-bil-i-ty(3), ig-no-rance(1), dark-ness(1), ap-pear-ance(2), com-et(1), move-ment(1), defi-nite(1), con-trol(2), grav-i-ta-tion-al(3), at-trac-tion(2), znx-i-e-ty,(2), for-mal-ly(1), pro-duce(2), ce-les-tial(2), vis-i-tor(1), di-min-ish(2), in-ter-est-ing(1), spec-ta-cle(1), her-ald(1), di-sas-ter(2), trans-gress(2), es-cape(2), pun-ish-ment(1), pen-al-tu(1), con-scious-ly(1), con-se-quence(1), im-pu-ni-ty(2), gravi-ta-tion(3), re-la-tion-ship(2), read-i-ly(1), child-hood(1), dis-ease(2), par-tic-u-lar(2), pre-vent-a-able(2), there-wise(1), rec-og-ni-tion(3), knowl-edge(1), phys-i-cal(1), u-ni-verse(1), per-fec-tion(2), sal-va-tion(2), ac-knowl-edge(2), ex-clus-ive(2), dic-ta-tor-ship(2), gen-er-a-tion(3), sci-en-tific(3), com-pre-hend(3), trust-ee(2), pos-ter-i-ty(2), au-thor-i-ty(2), de-fine(2), func-tion(1), lim-it(1), free-dom(1), com-plete(2), re-veal(2), re-strain(2), in-qui-ry(2), per-se-cute(1), po-si-tion(2), in-ves-ti-ga-tion(4), wel-come(1), crit-i-cism(1), re-joice(2), su-per-se-de(3)

## 単元25. 日英語の鏡像関係

### *Mirror Images in Japanese and English by Donal I. Smith*

【著者略歴】 Donald L. Smith (1935-) : 言語学者。ハワイ大学、京都外語大学、東北学院大学、清心女子大等で非常勤講師として日英語比較論、社会言語学、意味論等の講座を担当。

#### 1. 【視訳と語注】

NB (Nota Bene = L. Note Well) : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\***“mirror image” in Japanese and English** : 日英語の「鏡像関係」。日英語の大きな違いは「語順 (Word Order)」である。英語はS+V+O又はC、日本語は S+O 又は C+V. である。即ち動詞の位置が鏡の中の映像の様に逆様である。その様に「対照言語学 (Contrastive Linguistics)」の概念に依拠する造語である。

\***I do not suppose you have thought too much about mirror image, but I think any students of Japanese or students of English who comes to face the problem of syntax, how the word order is different, and so forth, can easily understand the concept.** 【視訳】 私は次の様には思いません。即ちあなた達が今までに十分に考えた事が在るとは思わないのです。鏡像関係と言う事に就いてですが、然し私は思うのですが、日本語専攻の学生や英語専攻の学生なら誰でもが、直面する問題が統語論、即ちどの様に語順が違うかと言う問題等ですが、その様な問題に直面する学生ならば直ぐに理解する事ができるでしょう。この概念を。【語注】 ① **you have thought too much about mirror image** : 「あなた達は鏡像関係に就いて十分に考えた事が今までに在る」。現在完了形 (経験)。② **any students of Japanese or students of English who comes to face the problem of syntax** : 「統語論の問題に直面する様に成る日本語専攻の学生や英語専攻の学生なら誰でも」。③ **how the word order is different, and so forth** : 「どの様に語順が違うかと言う様な問題等」。and so forth は熟語「〜等」。【類例】 and so on, and the like, and what not, and what have you, et al., etc. ④ **can easily understand the concept** : 「この概念を容易に理解する事が出来る」。the concept 「この概念」とは「鏡像関係」である。

\***If the mirror is flat and smooth, not bent or broken or anything, then everything is perfectly reversed, that is, everything is in order, and it is fortunately not all mixed up.** 【視訳】 もし鏡が平らで表面が滑らかであり、曲がったり割れたり、その他の傷が無ければ、全てが完全に逆様である。即ち、全ての物が規則正しく、そして嬉しい事に、ごちゃ混ぜには全く成らないのである。【語注】 ① **not bent or broken or anything** : 並列記述挿入句、前出の動詞isに繋がる。or anythingは慣用的な同類言及表現「その様な類のもの」。② **that is** : = that is to say 「即ち、詰まり、他言すれば」。③ **in order** : 「規則正しく整然とした状態で」。前置詞inは状態を表わし、名詞を従えて「〜の状態で、〜に成って」と言う意味。【類似表現】 in drink (酔っ払って)、in good health (健康で)、in debt (借金して)、in tears (涙を流して)、in cash (現金で)。④ **all** : 副詞 (否定的な語句と共に) 「全く〜ではない、一切〜しない」。

\***We can think of lots of examples where there are mirror images between things that go in just two ways.** 【視訳】 私達が考えられるのはその様な沢山の例が在ると言う事です。そこでは鏡像関係が色々な物事の間在り、然もそれ等独自の2つだけの仕方での様な関係が成り立っていると言う例です。【語注】 ① **lots of examples where there are mirror images between things** : 「色々な物事の間鏡像関係が在ると言う多くの例」。関係副詞 where (= in which) の先行詞は lots of examples. ② **that go in just two ways** : 「単に2つだけの独自の仕方、即ち二者間だけに起こる」。go は「反応する」と言う意味。

\***So far I have been talking about mirror images where we have the exact reverse where we have just two things, that is, you can just flip the coin and say if it is not this, it is that.** 【視訳】 これ迄ずっと私が話して来た事は鏡像関係に就いてでありましたが、その関係に於いては正に物が逆様であり、然も単に二つの事柄の逆様関係でありました。即ち、それはちょっとコインを投げて、表でなければ裏であると言える様なものでした。【語注】 ① **I have been talking** : 現在完了進行形 (動作の継続) 「今迄ずっと話して来た」。② **mirror images where~where** : 先行詞 mirror images に2つの関係副詞 where が修飾後置形式として後方から修飾しているが、視訳では関係詞の直前で区切って把握する。

\***The only thing that would not follow a perfect mirror image would be the location of the subject.** 【視訳】 唯一の事柄、即ち従わずに完全な鏡像関係には成らない事柄は、主語の位置であろう。【語注】 ① **The thing that would not follow a perfect mirror image** : 「完全な鏡像関係には成らないであろう事柄は」。that 以下は仮定法過去形の帰結節で構成される形容詞節である。条件節は前文 How would you say this in Japanese? の中に暗示されている。② **would be the location of the subject** : 仮定法過去形の帰結節。この文の述部である。

\***I suppose when you study English you are told: “Translate everything up to the verb, then go to the end of the sentence and proceed backward.” So, except for the subject, we have again a perfect mirror image.** 【視訳】 私の推測ですが、あなた達が英語を学習する時に次の様に言われると思います。即ち「先ず全てを訳しなさい、動詞の前までを。それから文尾に行って、前の方に向って逆戻りしなさい」と。その様な訳で、除外は主語ですが、その他は又も完全な鏡像関係なのです。【語注】 ① **Translate everything up to the verb** : 「動詞の前まで全てを訳しなさい」。これは「主語を訳しなさい」と言う事であり、日英両語の主語の位置が同じである事を示している。② **then go to the end of the sentence** : 「次に文尾に行きなさい」とは、日本語は主語の次に目的語や補語が来るが、英語ではそれに相当する語句が動詞の後、即ち文尾に来る事を示している。従ってこ

の部分に正に逆様である事が分かる。**③So, except for the subject, we have again a perfect mirror image :** 上記②で説明した事がこの文で確認される。

**\*This means that there is something about human nature or human mind that makes mirror images work quite well.** 【視訳】これは次の事を意味しています。即ち何か人間の特質や人間の心になんて、それが作用して鏡像関係の機能を巧みにしていると言う事です。【語注】①**there is something about~that...** : 「~には...である様な何かがある」。there isは短期記憶保留にして先に something 以下を把握する。②**that makes mirror images work quite well :** 「鏡像関係が極めて巧みに機能する様に仕向ける」。makesは不完全他動詞(使役動詞)、第5文型構成、原形動詞workが目的格補語「~に~させる」。

**\*In fact, linguistic research shows that we just have two types of languages: languages which have the verb first before all the objects and adverbs, and languages which have the verbs last after all the objects and particles, and so forth.** 【視訳】実際、言語学の研究によって次の事が分かっている。即ち単に2種類の言語しか存在しないと言う事である。1つは次の様な言語である。即ち動詞が先ず来て、その後全ての目的語や副詞が来ると言う言語である。2つ目の言語は、動詞が最後に来て、その前に全ての目的語や不変化詞(副詞類)等が来ると言う言語である。【語注】①**linguistic research shows that :** 無生物主語 linguistic research が第3文型を構成。shows that... 「~によって...と言う事が分かっている」。②**we just have :** 「単に~があると言う事である」。【類似表現】You can find~, You have~。③**particles :** 「不変化詞」。認知言語学の用語。動詞、名詞、形容詞等以外で、数、格、人称、性等に依る語形変化の無い品詞の総称。例えば「副詞」等。

**\*Another way to say this is that there are just two kinds of word order in language, either Object + Verb, as with Japanese, or Verb + Object, as with English.** 【視訳】別の言い方をすれば、単に2種類の語順しか言語には無いと言う事である。即ち1つは目的語+動詞であり、日本語がそうである。もう1つは動詞+目的語であり、英語がそうである。【語注】①**either~or...** : 相関接続詞「~かそれとも...かどちらか一方」。②**as with :** 「~がそうである様に」。as は接続詞(様態)「~の様に」。with は前置詞(関係、対象)「~に関して」。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「**強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)**」、所謂、**強弱リズム**である。その大きな要因の1つが**内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」**である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列举する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を( )内の算用数字で表わす。

im-age(1), con-cept(1), dif-fer-ence(1), per-fect-ly(1), for-tu-nate-ly(1), lan-guage(1), con-sid-er(2), prep-o-si-tion(3), post-po-si-tion(3), el-e-ment(1), sit-u-a-tion(3), res-tau-rant(1), grass-hop-per(1), em-bar-ras(2), fol-low(1), lo-ca-tion(2), sub-ject(1), re-ver-sal(2), u-su-al-ly(1), be-gin-ning(2), trans-late(1), pro-ceed(2), back-wards(1), in-ter-est-ing(1), ex-act-ly(2), in-for-ma-tion(3), in-clude(2), mis-take(2), hu-man(1), lin-guis-tic(2), re-search(1/2), ad-verb(1), par-ti-cle(1),

## 単元26. 言語の持つ特質

### Essentials of English Grammar by Otto Jespersen

【著者略歴】 Jens Otto Harry Jespersen (1860-1943) : デンマーク言語学者、英文法学者、元コーペンハーゲン大学教授。コーペンハーゲン大学卒、同大学院修了(主専フランス語、副専英語とラテン語)、1891年「English Case System」に就いての博士論文で博士号取得、オックスフォード大学留学。代表著書『A Modern English Grammar (1909-1949)』、『The Philosophy of Grammar (1924)』。

#### 1. 【視訳】 と 【語注】

NB (Nota Bene = L. Note Well) : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\*Language is nothing but a set of human habits, the purpose of which is to give expression to thoughts and feelings, and especially to impart them to others. 【視訳】 言語は単なる人間習慣の一式であり、その目的は表現する事であるが、思想や感情をである。そして特に伝える事であるが、他人へである。【語注】①is nothing but : 「単に～に過ぎない」。nothing butは慣用的な副詞句、onlyやjustと同義。②a set of human habits : 「人間習慣の一式」。a set of は短期記憶保留、先にhuman habitsを把握。③The purpose of which : 「その目的は」。関係代名詞 which の先行詞は a set of human habits。④is to give expression to : 「～を表現する事である」。is to は不定詞の慣用的な名詞的用法「～する事である」。give expression toは慣用的な連語「～を表現する」。⑤to impart them to others : 「他人に伝達する事」。この不定詞は前出動詞 is に繋がる。

\*As with other habits it is not to be expected that they should be perfectly consistent. 【視訳】 他の習慣と同じ様に、次の様な事は期待する事は出来ない。即ちそれ等の習慣が完全に一貫性を持っていると言う事はである。【語注】①As with other habits : 「他の習慣と同じ様に」。前置詞 with は「関係、観点」を、接続詞 as は「様態」を表わす。②it is not to be expected that : it は仮主語、真主語は that 誘導の名詞節。is not to be expected = it cannot be expectedは「Be動詞+不定詞」で可能性、義務、運命、予定等を表わす。③should : 接続詞 that 誘導の名詞節の中で、「希望、遺憾、勧告、意図、命令、決定を表わす。

\*No one can speak exactly as everybody else or speak exactly in the same way under all circumstances and at all moments, hence a good deal of vacillation here and there 【視訳】 誰も次の様に話す事は出来ない。即ち正確に全ての他の人の様にはである。或いは話し方が正確に同じ方法でと言う訳には行かない。然もあらゆる状況下で、全ての瞬時に於いてはである。従って可なり多くの動揺があちこちに在る。【語注】①No one can speak : 「誰も話す事は出来ない」。主語が完全否定語である表現は英語の特徴。【類語】 none, nothing, no～。②exactly as ~ / ... exactly in the same way / under all circumstances / and at all moments / : スラッシュ区分の各句はそれぞれ副詞句で後方から前出動詞 speak を修飾。③hence a good deal of vacillation here and there : hence は副詞、しばしば動詞が省略「この事から推測して、従って」。a good deal of vacillation here and there = there is a good deal of vacillation here and there. 「あちこちに可なり多くの動揺が在る」。here and there の【類似表現】 back and forth (前後に、左右に)、by and again (時々)、by and by (やがて、間も無く)、by and large (全般的に、概して)、hand and foot (忠実に、まめまめしく)、to and fro (前後左右に、行ったり来たり)。

\*The divergencies would certainly be greater if it were not for the fact that the chief purpose of language is to make oneself understood by other members of the same community. 【視訳】 その様な言葉の多様性は確かに最も大きなものに成るであろう、若し次の様な事実が無ければである。即ち言葉の目的が自分を理解してもらう事であると言う事実である。然も同じ共同体の人達に依ってである。【語注】①The divergencies would ~ if it were not for : この文は仮定法過去形。if it were not for は仮定法過去形の慣用的な条件節 (= /without, /but for, /were it not for) 「もし～が無かったならば」。The divergencies は「言葉の多様性」、即ち「言葉の違い」である。②is to make oneself understood by : 「～に依って理解してもらう事である」。is to は不定詞の名詞的用法「～する事である」。

\*This presupposes and brings about a more or less complete agreement on all essential points. 【視訳】 この事が前提と成り、次の事を齎している。即ち凡その完全一致であるが、全ての不可欠な言語的観点に就いての一致である。【語注】①This : 「この事」とは言葉の目的がコミュニティに於ける相互理解であると言う事。②brings about : 熟語「～を齎す」。③a more or less complete agreement on : 「～に就いての凡その完全一致」。more or less は慣用的な副詞句「凡その、多かれ少なかれ」。④on all essential points : 「言語に関する全ての基本的で不可欠な観点に就いての」。

\*The closer and more intimate the social life of a community is, the greater will be the concordance in speech between its members. 【視訳】 より身近で、より親密であればある程、1つのコミュニティに於ける社会生活は、それに比例して、次の事がより大きく成るであろう。即ちその地域に於ける人々の言葉の一致である。【語注】①The closer and more intimate ~ is, the greater will be ... : 「the + 比較級~, the + 比較級...」は比較級形容詞の連語的な相関慣用表現である。最初のtheは関係副詞「～であればある程、～すればある程」、後のtheは指示副詞「それだけ...である、～する」と言う意味である。②the concordance in speech between its members : 「その地域の人々の言葉の一致」。

\*In old times, when communication between various parts of the country was not easy and when the population was, on the whole, very stationary, a great many local dialects arose which differed very considerably from one another. 【視訳】 昔はコミュニケーションが国の様々な地域間では容易ではなく、住民も一般的に非常に停滞気味であったので、多くの方言が派

生して、可なり違っていた。それぞれ互いの言語は。【語注】①In old times, when～and when・・・：関係副詞 when が2つ、両者共に先行詞 In old times を修飾。②which differed very considerably from one another：関係代名詞 which の先行詞は a great many local dialects である。視訳では関係詞の直前で区切って情報把握をする。

\*the divergencies naturally became greater among the uneducated than the educated and richer classes, as the latter moved more about and had more intercourse with people from other parts of the country. 【視訳】 その様な言葉の違いは、当然乍ら、より大きく成ったが、無教育の人々の方が有教育の人々や富裕層の人々よりもである。その理由は、後者の人々の方が移動がより大きく、人的交流、即ち他地域からの人々との交流がより激しかったと言う事である。【語注】①the divergencies：「その様な言葉の違い」。②the uneducated than the educated：「教育を受けた人々よりも教育を受けていない人々」。「the +形容詞、又は分詞」は「～の人々」とか抽象名詞「～のもの、～の事」と言う意味を表わす。【類似表現】 the learned (博学な人々)、the deceased (故人)、the accused (被告者)、the old (老人)、the rich (金持ち)、the poor (貧乏人)、the true, the good, the beautiful (真善美) 等。

\*In recent times the enormously increased facilities of communication have to a great extent counteracted the tendency towards the splitting up of the language into dialects—class dialects and local dialects. 【視訳】 近代では膨大に増加したコミュニケーションの手段が、可なり大きな程度に、次の様な傾向を阻止している。即ち言葉が細分化して様々な方言に成って行く傾向である。例えば階級方言や地域方言である。【語注】①have to a great extent counteracted：現在完了形 (完了、結果) 「可なり～を阻止しており、結果的にその様な言語現象は派生していない」。②the tendency towards the splitting up of～into・・・：「～が・・・へ細分化する傾向」。splitting は動名詞、短期記憶保留にして先に of 以下を把握する。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列举する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を ( ) 内の算用数字で表わす。

hab-it(1), pur-pose(1), ex-pres-sion(2), es-pe-cial-ly(2), im-pact(2), ex-pect(2), per-fect-ly(1), con-sist-ent(2), ex-act-ly(2), cir-cum-stance(1), mo-ment(1), vac-il-la-tion(3), di-ver-gen-cy(2), cer-tain-ly(1), pur-pose(1), un-der-stand(3), mem-ber(1), pre-sup-pose(3), com-plete(2), a-gree-ment(2), es-sen-tial(2), in-ti-mate(1), com-mu-ni-ty(2), sta-tion-ar-y(1), di-a-lect(1), con-cord-ance(2), com-mu-ni-ca-tion(4), var-i-ous(1), pop-u-la-tion(3), dif-fer(1), con-sid-er-a-bly(2), re-cent(1), e-nor-mous-ly(2), in-crease(2), nat-u-ral-ly(1), un-ed-u-cat-ed(2), in-ter-course(1), fa-cil-i-ty(2), ex-tent(2), coun-ter-act(3), ten-den-cy(1), lan-guage(1)

## 単元27. 言語とは何か Language by Edward Sapir

【著者略歴】 Edward Sapir (1884-1939) : ユダヤ系ドイツ人、米国人類学者、言語学者、構造言語学を主導、『サピア=ウオーフの仮説』の提唱者。コロンビア大学卒、人類学者 Franz Boas に師事して博士号取得。シカゴ大学とエール大学で文化人類学教授。言語全般に関する著書多数、代表著書『Language - An Introduction to the Study of Speech (1921)』、『Classification of Native American Languages (1929)』。

### 1. 【視訳】と【語注】

**NB (Nota Bene = L. Note Well) :** 訳文は「**FIFO (入力順呼び出し法)**」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「**規範文法 (Prescriptive Grammar)**」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\***Language is a purely human and non-instinctive method of communicating ideas, emotions, and desires by means of a system of voluntarily produced symbols.** 【視訳】言語とは純粋に人間的で非本能的な方法であり、次の事柄を伝達する。即ち考えや感情や欲望の伝達である。そしてその手段は一つの体系であり、自発的に産出された記号の体系である。【語注】①**by means of a system of voluntarily produced symbols :** 「自発的に産出された記号の体系に依って」。by means of は慣用的な前置詞句 (手段) 「～に依って、～を手段にして」。

\***These symbols are, in the first instance, auditory and they are produced by the so-called "organs of speech."** 【視訳】これ等の記号は、先ず第一に、聴覚的であり、それ等が産出されるのは、所謂「言語器官」である。【語注】①**in the first instance :** 慣用的な副詞句「先ず第一に」。【類似表現】in the first place, to begin with, first of all等。②**by the so-called "organs of speech" :** 「所謂『言語器官』に依る」。尚、so-called の類似表現は what is called, what you call, as it is called 等。

\***There is no discernible instinctive basis in human speech as such, however much instinctive expressions and the natural environment may serve as a stimulus for the development of certain elements of speech, however much instinctive tendencies, motor and other, may give a predetermined range or mold to linguistic expression.** 【視訳】全く在り得なものは識別可能な本能的な基盤であるが、その様なものは人間の言語自体には無いと言う事である。如何に本能的な表現と自然環境が働いて次の事に対する刺激、即ち或る一定の言語要素の発展に対する刺激と成ったとしても、更に如何に本能的な傾向、即ち、運動神経の様なものが、事前準備的な範囲或いは鋳型を言語表現に与えたとしてもである。【語注】①**in human speech as such :** 「人間の言語自体には」。such as は慣用的な副詞句「その様なものとして、それ自体で」。②**however much~may-, and however much~may- :** 譲歩表現「如何に～が～しようとも」が2つ並列記述されている。③**motor and other :** 並列記述挿入句 (付加説明) 「運動神経の様なものが」。④**a predetermined range or mold :** 「事前に準備された範囲或いは鋳型」。これは言語表現を可能にする根源的な諸要素である。

\***Such human or animal communication, if "communication" it may be called, as is brought about by involuntary, instinctive cries is not, in our sense, language at all.** 【視訳】次の様な人間の或いは動物のコミュニケーション、仮に「コミュニケーション」と呼ばれるとしても、それが齎されるのは非自発的で本能的な叫び声に依るものであり、私達の考えでは、それは言語では全くない。【語注】①**Such~as...cries :** この文の主部である。述部は is not, in our sense, language at all である。②**if "communication" it may be called :** 並列記述挿入節 (文倒置)。助動詞 may は可能性。

\***I have just referred to the "organs of speech" and it would seem at first blush that this is tantamount to an admission that speech itself is an instinctive, biologically predetermined activity.** 【視訳】私が今言及した事は『言語器官』と言う事だったので、一見して、次の様に思われるかも知れない。即ちその様な言及は次の様に言うのと同じであると認めるものである。即ち言語自体は本能的に生物学的に事前に準備されている言語活動であると言う事である。【語注】①**it would be seem at first blush that :** 仮定法過去形帰結節「それは一見して～と言う事である様に思われるだろう」。at the first blush は熟語「一見して」。②**is tantamount to an admission that :** 慣用的連語「～を認める事と同じである」。

\***There are, properly speaking, no organs of speech; there are only organs that are incidentally useful in the production of speech sound.** 【視訳】適切に言えば、言語器官は全く無いのである。在るのは唯次の様な器官だけである。即ち偶然に利用されている器官であり、それを使って言語音が産出されているのである。【語注】①**properly speaking :** 「適切に言えば」。『無人称独立分詞構文 (Impersonal Absolute Participial Construction)』と言われる慣用的な副詞句である。分詞の意味上の主語が一般的な人 (we, you) を表わす。【類似表現】talking of~ (～と言えば)、judging from~ (～から判断して)、strictly speaking (厳格に言えば)、generally speaking (一般的に言えば)、considering~ (～を考えると)、seeing that... (・・・と言う事を見れば)、granting that... (・・・を認めれば)。

\***they are no more to be thought of as primary organs of speech than are the fingers to be considered as essentially organs of piano-playing or the knees as organs of prayer.** 【視訳】それ等は決して次の様な物としては考えられない。即ち一次的な言語器官としてである。それは次の事と同じである。即ち指の定義は本来的にピアノを弾く為の器官であるとか、膝は折りの為の器官であるとかではないと言うのと同じである。【語注】①**they are no more to be thought of as~than... :** 「それ等は・・・と同じ様に～としては考えられない」。are to は「Be動詞+不定詞」で可能性。no more~than... は慣用的な比較級連語「・・・と同じ様に～ではない」。②**are the fingers to be considered as :** 文倒置。正常語順は the fingers are to be considered as 「指が～であると考えられる」。③**or the knees as organs of prayer :** the knees の直後に are to be considered が省略。所謂



「前向きの空所化 (Forward Gapping)」である。

\***Speech is not a simple activity that is carried on by one or more organs biologically adapted to the purpose.** 【視訳】 言語は次の様な単純な活動ではない。即ちその営みが次の様な物に依って為されているのではないと言う事である。詰まり一つ或いはそれ以上の器官が生物学的に適合されて、その目的を達成しているのではないと言う事である。【語注】①**a simple activity that is carried on by** : 「～に依って営まれている単純な活動」。thatは関係代名詞、先行詞は a simple activityである。②**biologically adapted to the purpose** : 過去分詞adaptedの修飾後置形式形容詞的用法。

\***It is an extremely complex and ever-shifting net-work of adjustments—in the brain, in the nervous system, and in articulating and auditory organ—tending towards the desired end of communication.** 【視訳】 それは非常に複雑で常に変化している調整のネットワークである — 脳や神経系、調音と聴覚の器官等に於いて— そしてその向かう所は所期の目的、即ちコミュニケーションである。【語注】①**an extremely complex ever-shifting net-work** : 「非常に複雑で常に変化しているネットワーク」。ever-shifting と net-workは共にハイフン付き複合語で前者は形容詞、後者は名詞。②**句読点ダッシュ (—)** : 付加説明句を誘導。③**tending towards** : 現在分詞の修飾語後置形式形容詞的用法。

\***The lungs developed, roughly speaking, in connection with the necessary biological function known as breathing ; the nose, as an organ of smell; the teeth, as organs useful in breaking up food before it was ready for digestion.** 【視訳】 肺が発達したのは、大雑把に言って、次の事との関係に於いてである。即ち必要な生物学的な機能であるが、所謂、呼吸である。鼻は臭覚器官として発達した。歯は次の様な器官である。即ち有用に活用して食べ物を砕き、態勢を整えて消化へと進めるのである。

【語注】①**the nose, . . . ; the teeth, . . .** : 「前向きの空所化 (Forward Gapping)」に従って、動詞 developed が省略。②**roughly speaking** : 「無人称独立分詞構文 (Impersonal Absolute Participial Construction)」。③**in connection with** : 慣用的な前置句「～との関係で」。④**known as** : 「～として知られている」。過去分詞の修飾後置形式形容詞的用法。⑤**before it was ready for digestion** : 「その後に食べ物は消化の準備が出来上がる」。接続詞 before は「その後に～した」と視訳すれば語順整合がスムーズになる。同じ様な観点で前置詞 after は「その前に～した」と視訳すれば良い。【類例】 he had learned it was more conducive to peace to leave his wife with the last word **after many years of marriage life** (W. S. Maugham: *Rain*)。彼は最後の言葉を妻に言わせておく事が、平和を齎す最上の方法である事を会得していた。**実は彼はその前に長年に亘って結婚生活をしていたのだった。**

\***If, then, these and other organs are being constantly utilized in speech, it is only because any organ, once existent and in so far as it is subject to voluntary control, can be utilized by man for secondary purposes.** 【視訳】 若し、従って、これ等の器官や他の器官が常に利用されているならば、言語に於いてであるが、その唯一の理由は如何なる器官も一度存在して、次の様な状況下に置かれる限り、即ち自発的な任意の制御を受けると言う状況であるが、その様な器官は利用され得るのである。人間に依って、二次的な目的の為に。【語注】①**are being constantly utilized** : 受動態の現在進行形「常に利用されつつある」。②**it is only because** : 「それは単に～と言う理由に依るものである」。③**once existent and in so far as it is subject to voluntary control** : 「如何なる器官も一度存在して、自発的な任意の制御を受けられる限り」。in so far as は慣用的な接続詞句 (条件) 「～する限りは」。is subject to は熟語「～の支配を受ける」。

\***It gets what service it can out of organs and functions, nervous and muscular, that have come into being and are maintained for very different ends than its own.** 【視訳】 言語が得ているものは、可能な限りの恩恵的な活用であるが、それは器官や機能からのものであり、神経や筋肉のそれである。それ等は存在する様に成り、現在は維持されて、違った目的の為に使われている。本来の目的とは違った目的の為にである。【語注】①**It gets what service it can out of** : 「言語は可能な限りの恩恵を～から得ている」。it can の直後に動詞 gets が省略、「前向きの空所化 (Forward Gapping)」である。②**nervous and muscular** : 並列記述挿入句、前出語句 organs and functions の補足説明。③**that have come into being and maintained for** : 「～の為に存在する様に成り現在維持されている所の」。関係代名詞 that の先行詞は organs and functions である。come into being は熟語「存在する様に成る」。④**for very different ends than its own** : 「それ自体の目的とは非常に異なった目的の為に」。different~than = different~fromは慣用的連語である。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「**強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)**」、所謂、**強弱リズム**である。その大きな要因の1つが**内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」**である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列举する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を ( ) 内の算用数字で表わす。

non-in-stinc-tive(3), com-mu-ni-cat-ing(2), e-mo-tion(2), vol-un-tar-i-ly(3), sym-bol(1), au-di-to-ry(1), dis-cern-i-ble(2), in-stinc-tive(2), en-vi-ron-ment(2), stim-u-lus(1), de-vel-op-ment(2), el-e-ment(1), ten-den-cy(1), pre-de-ter-nime(3), lin-guis-tic(2), com-mu-ni-ca-tion(4), in-vol-un-tar-y(2), tan-ta-mount(1), ad-mis-sion(2), bi-o-log-i-cal-ly(3), ac-tiv-i-ty(2), prop-er-ly(1), in-ci-den-tal-ly(3), pro-duc-tion(2), lar-ynx(1), pal-ate(1), u-ti-lize(1), pri-mar-y(1), con-sid-er(2), es-sen-tial(2), pur-pose(1), ex-tre-mely(2), com-plex(2), ad-just-ment(2), art-ic-u-late(2), au-di-to-ry(1), con-vec-tion(2), bi-o-log-i-cal(3), di-ges-tion(2), con-stant-ly(1), ex-is-tent(2), vol-un-tar-y(1), con-trol(2), sec-ond-ar-y(1), phys-i-o-log-i-cal-ly(4), pre-cise(2), mus-cu-lar(1)

## 単元28. 言語と種の類似性

### The Descent of Man by Charles Darwin

【著者略歴】 Charles Robert Darwin (1809-1882) : 英国自然科学者、地質学者、生物学者、自然選択説を構築。エディンバラ大学 (医学)、ケンブリッジ大学 (キリスト教神学) 卒。代表著作『On the Origin of Species (1859)』、『The Descent of Man (1871)』

#### 1. 【視訳】 と 【語注】

NB (Nota Bene = L. Note Well) : 訳文は「FIFO (入力順呼び出し法)」に基づく【視訳 (Sight Translation)】、語彙説明は「規範文法 (Prescriptive Grammar)」に依拠する【語注 (Glossary)】である。

\*The formation of different languages and of distinct species, and the proofs that both have been developed through a gradual process, are curiously parallel. 【視訳】 多様な言語の形成と個別的な種の形成、そして更に次の様な証拠、即ち両者の発展は漸進的な過程であったと言う証拠等には奇妙な類似性が在る。【語注】 ①of distinct species : この of-phrase は文頭のThe formationに繋がる。尚、この様な of-phrase は直前の被修飾語句を短期記憶保留にして「逆展開型情報処理法 (Inverted Process of Information)」を使わざるを得ないが、全体を1つの塊として把握する方が円滑な語順整合が可能に成る。②are curiously parallel: この文の述部「奇妙に似通っている」。

\*We find in distinct languages striking homologies due to community of descent, and analogies due to a similar process of formation. 【視訳】 我々には次の事が分かっている。即ち様々な言語の中には顕著な相同が在ると言う事である。そしてその起因は系譜の類似性である。更に相似が在るが、その起因は形成過程の類似性である。【語注】 ①We find in~... : 「私達は~の中に...を見出す」、即ち「~の中には...が在る」。②due to community of descent : 「系譜の類似性に起因する」。community は「共通性、類似性」である。

\*The manner in which certain letters or sounds change when others change is very like correlated growth. 【視訳】 次の様な様態、即ち或る文字や音の変化の仕方であるが、他のものが変化すると、それと共に変化するという様態は非常に相関的成長に似ている。【語注】 ①The manner in which~ : 「~と言う様態、仕方」。【類似表現】 the way in which (~の仕方)、the method in which (~の方法)、an attitude in which (~の態度)。②is very like : 「~に非常に類似している」。Like は形容詞「~に似ている」。

\*We have in both cases the reduplication of parts, the effects of long-continued use, and so forth. 【視訳】 両方の事例には次の様な事柄が在る。即ち部分の重複と長期使用に依る影響等である。【語注】 ①We have in both cases~ : 「その両方の事例には~が在る」。We have = We find は There is (/are)と同義。②long-continued : ハイフン付き複合語 (形容詞) 「長期に亘る」。③and so forth : 慣用的な副詞句「等々」。【類似表現】 and so on, and the like, and all that, and such, and the rest, and all the rest of it, and other things, and what not, or whatever, etc. 等。

\*The frequent presence of rudiments, both in languages and in species, is still more remarkable. 【視訳】 頻繁に在るのが痕跡器官であり、言語にも種にも見られ、より一層の顕著な類似性である。【語注】 ①The frequent presence of rudiments : この表現は英語の特徴である「名詞化表現 (Nominalization)」である。動詞や形容詞、副詞等の中心的な原義を名詞化し抽象概念化して表現の焦点を当てる表現技法であり英語で多用される。尚、元獨協大学教授四宮満 (文体論) は「文法的メタファー (Grammatical Metaphor)」と言う用語を使って詳説している。【類例】 My father and mother also began to tire of me. The novelty of having me was wearing off. (父や母の眼にも私が煩わしく成り始めた。私に対する物珍しさが次第に陳腐に成って行ったのである) ②still more remarkable : 「更に一層の顕著さ」。副詞 still は more を修飾「更に一層の」

\*The letter m in the word am, means I; so that in the expression I am, a superfluous and useless rudiment has been retained. 【視訳】 文字mは、単語 am の中の文字であるが、その意味はIである。従って表現 I am の中には余分に役に立たない痕跡が今も保存されているのである。【語注】 ①so that : 慣用的な接続詞句で直前に句読点コンマ或いはセミコロンが在る場合「従って、その結果」と言う意味である。尚、直前にコンマが無ければ副詞節誘導の接続詞句 (目的) であり「一する様に、一する為に」と言う意味に成る。②has been retained : 現在完了受動態 (継続) 「保存されて来ており現在も存在している」。

\*Languages, like organic beings, can be classed in groups under groups; and they can be classed either naturally according to descent, or artificially by other characters. 【視訳】 言語は、有機体と同じ様に、次の様に分類する事が出来る。即ちグループに分類し、更に下部グループに分類する事が出来る。そして言語は次のどちらかの分類法に依って分類され得る。即ち1つは言語の自然な生成過程に応じて分類する方法であり、もう1つは人工的に他の特徴に基づいて分類する方法である。【語注】 ①can be classed in groups under groups : 「幾つかのグループに分類し、更に下部グループに分類する事が出来る」②either~or... : 相関関係接続詞「~か或いは...か、どちらか一方」。

\*A language, like a species, when once extinct, never, as Sir C. Lyell remarks, reappears. 【視訳】 一つの言語は、一つの種と同じ様に、一度絶滅すると、C・ライエル卿が言っている通り、決して再び出現する事は無い。【語注】 ①when once extinct : 接続詞whenが誘導する副詞節では「主語+動詞」がしばしば省略されて、時や条件を表わす「一度絶滅すると」。②Sir C. Lyell : Sir Charles Lyell (1797-1875)、スコットランド地質学者、法律家、元ロンドン King's College 教授、近代的地質学の基礎「斉一説」を普及。代表著書『Principles of Geology (1830-1833)』、『Travel in North America (1845)』。

\*Distinct languages may be crossed or blended together. 【視訳】 異なった言語には次の様な可能性が在る。即ち交配したり交じり合ったりする可能性である。【語注】①may : 助動詞 (可能性)。尚、助動詞 may には次の様な用法が在る。「推量」「許可」「容認」「祈願」、副詞節の中で「目的」「譲歩」。②blended together : 「交じり合う」。慣用的な連語、前出動詞 be に繋がる。

\*We see variability in every tongue, and new words are constantly cropping up, but as there is a limit to the powers of the memory, single words, like whole languages, gradually become extinct. 【視訳】 可変性が全ての言語に在り、新しい単語が絶え間なく派生しているが、限界が記憶力に在るので、単純な単語でも、言語全体がそうである様に、次第に消滅して行く。【語注】①We see variability : 「可変性が在る」。We see は「～が在る」と言う意味。【類似表現】 There is, You can find, We have 等。②there is a limit to : 「～には限界が在る」。前置詞 to は「関連、関係、反応」を表わす。即ち「concerning (～に関して)」、「in respect of (～に就いて)」、「in response to (～に反応して)」である。

\*As Max Muller has well remarked : —“A struggle for life is constantly going on amongst the words and grammatical forms in each language. The better, the shorter, the easier forms are constantly gaining the upper hand, and they owe their success to their own inherent virtue.” 【視訳】 マックス・ミュラーは次の様に当を得た陳述をしている。即ち「生存闘争が常に進行しているが、それは単語と文法形式に関してであり、それぞれの言語に於いてである。より良く、より短く、より理解し易い形式が常に勢力を獲得するが、その成功の要因は言語自体の生得的な長所である」と。【語注】①Max Muller : 1823-1900、ドイツ生まれの英国人 (帰化)、哲学博士、インド哲学者、東洋学者、比較言語学者、比較宗教学者。元オックスフォード大学教授。代表著書『The Sacred Books of the East (1879-1910)』、『Introduction to the Science of Religion (1870)』。②句読点ダッシュ (—) : 部分的引用「即ち次の通りである」。③is constantly going on among : 「常に～の間で行われている」。is going on は慣用的進行形連語「行われている」。④owe~to... : 慣用的連語「～は...のお蔭である」。

\*To these more important causes of the survival of certain words, mere novelty and fashion may be added. 【視訳】 これ等のより重要な原因、即ち或る単語が生き残る原因に対して、単なる新奇性や流行性が付加される事も在り得る。【語注】①全文 : 文倒置 (Inversion)。正常語順は Mere novelty and fashion may be added to these more important causes of the survival of certain words である。尚、文倒置に就いては単元17「雪女」で言及した通りである。②may be added to : 「～に加えられる」。受動態連語。

\*The survival or preservation of certain favoured words in the struggle of existence is natural selection. 【視訳】 生存と保存、即ち或る好まれる単語の生存と保存であるが、それは生存競争に於ける自然淘汰なのである。【語注】①The survival or preservation of certain favoured words : 「生存と保存、即ち或る好まれる単語の生存と保存であるが」。この視訳では「生存と保存」と言う訳語を2度繰り返しているが、直読直解法に依る情報把握が最優先である為、この様な訳法技術も許容範囲内である。②natural selection : 進化論の中心的な概念「自然淘汰 (自然選択)」である。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)」、所謂、強弱リズムである。その大きな要因の1つが内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列挙する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を ( ) 内の算用数字で表わす。

for-ma-tion(2), dif-fer-ent(1), lan-guage(1), dis-tinct(2), de-vel-op(2), grad-u-al(1), pro-cess(1), cu-ri-ous-ly(1), par-al-lel(1), per-ceive(2), ac-tu-al-ly(1), im-i-tation(3), var-i-ous(1), ho-mol-o-gy(2), sim-i-lar(1), cor-re-rat-ed(1), re-du-pli-ca-tion(4), ef-fect(2), fre-qu-ent(1), pres-ence(1), ru-di-ment(1), re-mark-a-ble(2), ex-pres-sion(2), su-per-flu-ence(2), use-less(1), re-tain(2), an-cient(1), pro-nun-ci-a-tion(4), or-gan-ic(2), nat-u-ral-ly(1), ac-cord-ing(2), de-scent(2), ar-ti-fi-cial-ly(3), char-ac-ter(1), dom-i-nant(1), di-a-lect(1), grad-u-al(1), ex-tinc-tion(2), re-mak(2), re-appear(2), to-geth-er(2), var-i-a-bil-i-ty(4), con-tin-u-al-ly(2), crop-ping(1), lim-it(1), mem-o-ry(1), grad-u-al-ly(1), strug-ple(1), con-stant-ly(1), gram-mat-i-cal(2), up-per(1), suc-cess(2), in-her-ent(2), vir-tue(1), im-por-tant(2), sur-viv-al(2), cer-tain(1), nov-el-ty(2), fash-ion(1), add-ed(1), pres-er-va-tion(3), fav-our(1), ex-ist-ence(2), nat-u-ral(1), se-lec-tion(2)

## 番外編5 「青春」

### From the Summit of Years, Four Score by Samuel Ullman

【著者略歴】 Samuel Ullman (1840-1924) : ユダヤ系米国詩人、実業家、教育者、人道主義者。11歳の時、人種差別を逃れて家族と渡米。1884年アラバマ州バーミングハムに移住、教育員会に所属、黒人の子供達にも平等の教育を主張、その他、宗教、教育、地域社会の為に多くの業績を残した。公職を退いた後はエッセイや詩作に専念。代表詩「Youth (1920)」。この詩はサミュエルが80歳の時に家族が出版した上記「From the Summit of Years, Four Score (80年の歳月の頂から)」に収められている。

#### 1. 【視訳】 と 【語注】

\*Youth is not a time of life; 【視訳】 青春とは人生の或る一定の期間ではない。【語注】 is not: 短期記憶保留、先に a time of life を把握する。前置詞 of が誘導する形容詞句が多用されているが「修飾語後置形式 (Postposition)」の形容詞句であり、従来の「逆展開型情報処理法 (Inverted Process of Information)」を使わざるを得ない表現である。然し1つの纏まった意味単位の塊として把握すればスムーズな視訳が可能になる。

\*it is a matter of the will, a quality of the imagination, a vigor of the emotions; 【視訳】 それは意志の問題であり、想像力の質の問題であり、情熱の激しさの問題である。【語注】 a vigor of the emotions: 「感情の活力」とは「情熱の激しさ」である。

\*It is the freshness of the deep springs of life. 【視訳】 青春とは新鮮さであり、深い泉から湧き出るものであり、生命の泉である【語注】 freshness: 「新鮮さ、若々しさ」。接尾語「-ness」は形容詞や分詞に付加されて抽象名詞(性質、状態)を造語する。この詩は英語の特徴である「名詞化表現 (Nominalization)」が多用されている。その結果、of-phrase がしばしば出て来る。一方、日本語は「動詞中心思考 (Verb-Oriented Way of Thinking)」の言語である。従って英語の名詞化表現は動詞的に考えれば理解し易くなる。【類似表現】 An accidental kindness touched him so much that sometimes he did not venture to speak in order not to betray the unsteadiness of his voice. (W. S. Maugham: *Of Human Bondage*) たまたま親切にされると、とても身に浸みて、しばしば思い切ることが出来ず、話せなかった。と言うのは、見透かされはしないかと思ったのである。震えている自分の声。

\*Youth means a temperamental predominance of courage over timidity of the appetite, for adventure over the love of ease. 【視訳】 青春とは気まぐれな優位性であり、勇気が打ち勝って、意欲の無さを克服し、冒険心を持って易きを好む心を戒める事である。【語注】 ① a temperamental predominance of ~ over ~: 「気まぐれな~の優位性で~に打ち勝つ」。② timidity of the appetite: 「意欲の臆病さ」とは「意欲の無さ」である。timidityは短期記憶保留、先に of the appetite を把握。③ for adventure over: 「冒険心を求めて~に打ち勝つ」。前置詞 for は「~を求めて」。④ the love of ease: 「安易さを好む」とは「難しさを回避して安易さに流れる心」である。この様な前置詞 of は目的関係を表す。【類似表現】 a teacher of English (英語を教えている先生)、the writing of a letter (手紙を書く)、a picture of the king (王様が写っている写真) 等。

\*Nobody grows old merely by a number of years. 【視訳】 誰も老いはしない、単なる多くの年数だけでは。【語注】 ① Nobody grows old: 「誰も老いはしない」。主語 Nobody は完全否定代名詞である。【類語】 no one、none、nothing、「no+名詞」等。② a number of years: 「多くの歳月」。数の大小を明確に表す為には a great (/small) number of とする。尚、the number of years は「年数」である。

\*This often exists in man of sixty more than a boy of twenty. 【視訳】 この様な心情がしばしば存在するのは60歳の人間の心中であり、それはより多いのである、20歳の青年よりも。【語注】 ① This: 「この様な心情」、即ち作詞者が強調する「青春」である。② a boy of twenty: 「20歳の青年」。a boyは短期記憶保留にして、先に of twenty を把握。

\*there is in every being's heart the lure of wonder 【視訳】 全ての人の心に在る物は、不思議な物に対する魅力感である。【語注】 ① there is: 短期記憶保留、先に in 以下を把握。② in every being's heart: 「全ての人の心の中に」。通常、一人の人間は a human being、人類は human beings である。③ the lure of wonder: 前置詞 of は既に言及済みの目的関係「~に対して魅力を感じる」。

\*the unfailing child-like appetite of what's next 【視訳】 尽きる事を知らない子供の様な探究心を持って「その先は何だろう」と思う。【語注】 ① child-like: ハイフン付き複合語。-like は「複合語構成付加詞 (Compositional Adjunct)」と呼ばれる一種の接尾語であり、名詞に付加して形容詞を造語する。【類語】 -based (~に本社を置く、~を原料にして)、-friendly (~に優しい)、-made (制作した、構成した)、-minded (~気質の、~に関心が在る)、-oriented (~志向の) 等。② of what's next: 「その先は何だろう」と思う未知なる物に対する好奇心。前置詞 of は言及や関係を表す「~に関して、~に就いて」。

\*and the joy of the game of living. 【視訳】 そして喜びが在る。人生と言うゲームの喜びが。【語注】 the game of living: 前置詞 of は同格関係「~言う」。

\*so long as it receives message of beauty, hope, cheer, courage and power from men and from the Infinitive, so long are you young 【視訳】 その無線通信局が次の様なメッセージを受信する限り、即ち美や希望、喜び、勇気、そして力のメッセージを人々からそして神から受取る限り、それだけ長くあなたは若さを保ち続ける事が出来る。【語注】 ① so long as: 慣用的接続詞句(条件)「~する限り」。短期記憶保留、先に it 以下を把握。② the Infinitive: 「無限なる物」、即ち「神」

である。**③so long are you young** : 文倒置「それだけ長くあなたは若い」。通常語順は you are young so long である。

**\*When the aerials are down, and your spirit is covered with snows of cynicism and the ice of pessimism, then you are grown old, even at twenty** 【視訳】 そのアンテナが朽ちて、あなたの精神が次の様な物で覆い被されると、即ち皮肉の雪や悲しみの氷で覆われると、あなたは年老いて仕舞う。例え20歳であっても。【語注】**①the aerials are down** : downには原義的に負の意味合いがある。従って、文脈に呼応して適切な日本語に置き換えねばならない。此处では形容詞として「故障している、機能を果たさない」と言う意味である。尚、視訳では「～で覆い被される」と言う訳文を2度繰り返しているが、この様な視訳は情報把握を確実にする為に使われる常套手段である。**②snows of cynicism and the ice of pessimism** : 前置詞ofは既に言及した通り同格関係を表わす「～と言う」。

**\*as long as your aerials are up, to catch the waves of optimism, there is hope you may die young at eighty.** 【視訳】 あなたのアンテナが健在である限り、楽観と言う電波を捉えて、次の様な希望がある。即ちあなたは若く死す事が出来ると言う希望である。80歳にしても。【語注】**①your aerials are up** : 叙述的形容詞 up にはプラスの意味合いがある。従って此处では「健在である、機能を果たしている、高く掲げる」と解釈する。**②to catch the waves of optimism** : 「楽観と言う電波を捉えて」。次に続く there is hope～ の理由を述べる不定詞の副詞的用法である。**③there is hope** : 「～と言う希望がある」。直後に名詞節誘導の接続詞thatが省略されている。**④you may die young at eighty** : 「あなたは80歳であっても若い状態で死ぬ事が出来る」。助動詞 may は可能性を表わす。

### 【全詩視訳】

青春とは人生の或る一定の期間ではなくて、心の状態である。バラ色の赤い唇の問題ではなくて、意志の問題であり、想像力の質の問題であり、情熱の激しさの問題である。即ち青春とは新鮮さであり、深い泉から湧き出るものであり、生命の泉の新鮮さである。

青春とは気まぐれな優位性であり、勇気が打ち勝って、意欲の無さを克服する事である。この様な心情がしばしば存在するのは60歳の人の心の中に於いてであり、それはより多いのである、20歳の青年よりも。人が老いるのは単に歳月の積み重ねに依るものではない。私達が年老いるのは理想を失う事に依るものである。

歳月は確かに皺を皮膚に刻むかも知れないが、諦めて情熱を失う事が心に皺を刻むのである。心配と恐れ、そして自己不信が心を屈服させて、精神を微塵化する。

60歳でも、16歳でも、全ての人の心に在る物は、不思議な物に対する魅惑の心であり、尽きる事の知らない子供の様な探究心を持って「その先は何だろう」と思う未知なる物に対する好奇心である。そして喜びがある。人生と言うゲームの喜びが。中心部、即ちあなたの心と私の心の中の中心部には、無線通信局が在り、それが次の様なメッセージを受信する限り、即ち美や希望、喜び、勇気、そして力のメッセージを、人々から、そして神から受取る限り、それだけ長くあなたは若さを保ち続ける事が出来る。

そのアンテナが朽ちて、あなたの精神が次の様な物で覆い被されると、即ち皮肉の雪や悲しみの氷で覆われると、あなたは年老いて仕舞う。例え20歳であっても。然しあなたのアンテナが健全であり、楽観と言う電波を捉えるならば、次の様な希望がある。即ちあなたは若く死す事が出来ると言う希望である。80歳にしても。

## 2. 【音節 (Accentuation)】

英語の音声上の特徴は「**強勢拍子リズム (Stress-Timed Rhythm)**」、所謂、**強弱リズム**である。その大きな要因の1つが**内容語の音節に置かれる「第1強勢 (Primary Stress)」**である。以下、各単元に於ける単語の音節分析を列挙する。尚、各単語の構成音節をハイフンで区分し、第1強勢が置かれている音節を ( ) 内の算用数字で表わす。

qual-i-ty(1), i-mag-i-na-tion(4), vig-or(1), e-mo-tion(2), fres-ness(1), tem-per-a-ment-al(4), pre-dom-i-nance(2), cour-age(1), ti-mid-i-ty(2), ap-pe-tite(1), ad-ven-ture(2), ex-ist(2), de-sert(名1、動2), en-thu-si-asm(2), six-teen(2), un-fail-ing(2), ap-pe-tite(1), wire-less(1), re-ceive(2), mes-sage(1), in-fi-nit(1), aer-i-al(1), cyn-i-cism(1), pes-si-mism(1), op-ti-mism(1)